

ISSN 1349-6522

平成 25 年 度

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構

十勝農業試験場年報

—2013—

平成26年 7 月

(地独)道総研 十勝農業試験場

目 次

A 概 要	1
1. 沿 革	1
2. 位置及び土壌	2
3. 面積及び利用区分	2
4. 機 構	2
5. 職 員	3
6. 今年度設置(廃止)した施設等	4
7. 新たに購入した主な備品	5
8. 予算執行	5
9. 圃場の作付及び設備・機械の整備管理	6
10. 建物等配置図	7
B 作 況	9
1. 気象の概要	9
2. 当場の作況	12
C 試験研究及び地域支援活動の概要	18
D 試験研究及び地域支援活動の課題名	22
E 試験研究成果の公表	31
1. 普及事項及び参考事項	31
2. 論文、資料及び刊行物印刷	32
F 研修及び技術指導	36
1. 研修生の受入れ	36
2. 技術指導	37
3. 参観・視察者対応	41
G 広報活動、研究企画・場運営等	44
1. 広報活動	44
2. 研究企画・場運営等	45
3. 自己点検への対応表	48

A 概 要

1. 沿 革

当場は、明治28年、河西郡帯広村（現帯広市）に十勝農事試作場として開設され、畑作物の試作試験を行ったのが始まりである。翌年（明治29年）には水稻の試験圃、果樹園の設置が行われた。

明治34年、北海道庁地方農事試験場十勝分場と改称、明治40年河西郡幸震村（現帯広市大正町）に高丘地試験地が設置された。さらに、明治43年第1期北海道拓殖計画により農事試験機関の統一が行われ、北海道農事試験場十勝支場に改称し、その後も、幾多の変遷を経ながらも、十勝独自の自然条件に適應する畑作、稲作、さらに経営方式の試験研究に努め、農業の進展、管内の開発と歩みをとみにした。

昭和25年、農業試験研究機関の整備統合により、従来の試験機関が国立と道立に2分され、当場は道費支弁の北海道立農業試験場十勝支場となり、同時に高丘地試験地は十勝支場分室となったが、分室は昭和28年大正火山灰研究室となり、国立農試に移管された。

さらに、昭和28年より北海道の施設として農業試験機関の整備拡充が計画され、当場もその計画の一環として移転拡充を行うこととなり、昭和33年より河西郡芽室町への移転に着手し、昭和34年10月には現庁舎が完成、翌35年から畑作関係の試験業務は芽室に移して実施し、昭和36年には低温恒温室、温室、水稻試験地施設も完成して移転はすべて完了した。

昭和39年11月、本道の農畜一体となった試験研究を行うための機構改革が実施され、当場は北海道立十勝農業試験場と改称された。

この間、昭和31年に農林省の全額助成による豆類育種指定試験地、昭和36年には豆類第2育種指定試験地、昭和38年にはとうもろこし育種指定試験地が設置されたが、豆類第2育種指定試験地は廃止され、豆類第1科に吸収された。

昭和43年には地力保全基本調査が開始され、昭和48年には小豆育種指定試験地が設置された。また、技術普及のため、昭和26年から専門技術員が駐在していたが、昭和44年に専門技術員室を設け、以後配置数が徐々に増加した。

さらに、昭和59年8月には経営試験研究体制の再編整備に伴い、経営科が新設され、昭和62年4月には園芸作物部門強化に伴い、作物科が畑作園芸科と改称された。

昭和61年12月には、農（畜）試整備計画により庁舎が

増築され、共同実験室及び研究室、会議室が拡充された。

平成4年、道立農業試験場の研究基本計画に基づく再編整備により研究部長が置かれ、畑作園芸科が廃止されるとともに、作物科と園芸科が独立の科として新設され、てん菜科はてん菜特産作物科、病虫予察科は病虫科と改称された。

平成6年には、そうか病総合プロジェクトチームが設置され、病虫科、作物科及び土壌肥料科の研究員が担当することとなった。

平成7年（1995）は、明治28年（1895）に十勝農事試作場が開設されてから100年にあたり、十勝農業試験場100周年記念の事業を行った。

平成12年には道立農試組織再編に伴い、作物研究部、生産研究部及び技術普及部、総務課の3部1課編成となった。うち、作物研究部は、大豆科、小豆菜豆科、てん菜畑作園芸科、管理科の4科、生産研究部は栽培システム科、栽培環境科、病虫科、経営科の4科構成となり、専門技術員室は技術普及部に名称変更となった。また、実証事業を中心とする課題を立ち上げ、技術普及部次長をチーフとし、研究員と専門技術員をスタッフとする技術体系化チームで対応することとした。

平成18年には道立農業試験場研究基本計画ならびに普及事業見直しの基本方向に基づく組織再編により、てん菜畑作園芸科は畑作園芸科と改称された。また、専門技術員機能は普及センターにおいても担うこととなり、技術普及部は部長、次長、主任普及指導員及び主査（地域支援）4名の体制として組織再編された。

平成22年4月1日に地方独立行政法人化し、北海道立総合研究機構農業研究本部十勝農業試験場として改組された。研究部は豆類グループ（研究支援を含む）、生産システムグループ、生産環境グループ、地域技術グループの部門を横断する研究に対応する4グループ体制に再編成された。また、3名の普及職員が北海道農政部技術普及課の所属として十勝農業試験場（技術普及室）に駐在し、地域技術グループとともに、普及事業との連携、地域課題の解決に当たることとした。

2. 位置及び土壌

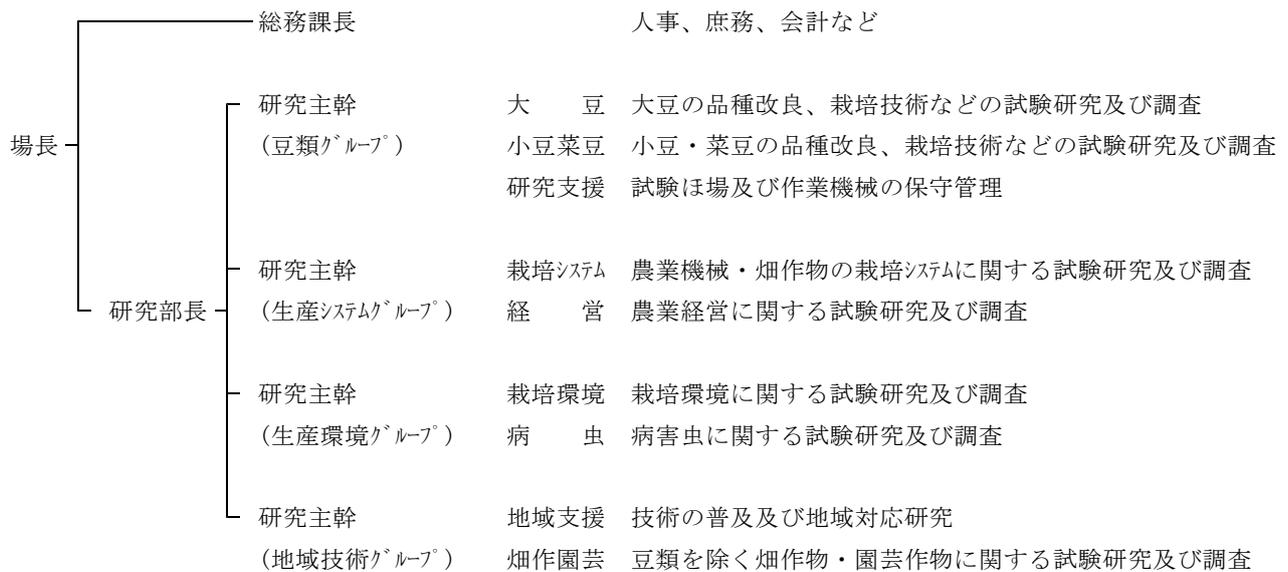
庁舎及び試験圃は河西郡芽室町新生にあり、JR北海道根室本線芽室駅から南東へ約5km、帯広市の西方約16kmの距離にある（東経143°031'、北緯42°53'、海拔

98m）。土壌は伏古統に属し、礫、砂層及び凝灰質堆積物の上に旭岳、雌阿寒岳、十勝岳B、十勝岳Cの火山噴火物が降積、被覆した砂壤土である。

3. 面積及び利用区分

総面積 780,099㎡ (単位: ㎡)	
区分	面積
(1)畑試験地	780,099
(建物敷地)	(95,175)
(防風林)	(63,300)
(原生林)	(19,454)
(幹線道路)	(16,688)
(試験圃場)	(585,482)

4. 機 構



〈十勝農業試験場技術普及室〉

上席普及指導員 — 主任普及指導員 — 主査（地域支援）

※ 所属：北海道農政部技術普及課（十勝農業試験場駐在）

5. 職 員

(1) 現在員（平成26年3月31日現在）

職 名	氏 名	職 名	氏 名
場 長	木村 秀雄	研究主幹(生産環境グループ)	渡邊 祐志
研 究 部 長	高宮 泰宏	主 査（栽培環境）	酒井 治
総 務 課 長	高橋 尚士	研 究 主 査	田村 元
主 査（総務）	大井 孝	研 究 主 任	須田 達也
主 査（調整）	小林 英範	主 査（病虫）	安岡 眞二
指 導 主 任	工藤 健一	研 究 主 査	池田 幸子
主 任	寺本 梨紗	研 究 主 任	小澤 徹
研究主幹(豆類グループ)	田中 義則	〃	三宅 規文
主 査（大豆）	三好 智明	研究主幹(地域技術グループ)	荒木 和哉
研 究 主 任	小林 聡	主 査（地域支援）	岩崎 暁生
〃	品田 博史	主 査（畑作園芸）	平井 剛
〃	山口 直矢	研 究 主 査	松永 浩
主 査（小豆菜豆）	佐藤 仁	〃	田縁 勝洋
研 究 主 任	田澤 暁子		
〃	奥山 昌隆		
〃	堀内 優貴		
研 究 職 員	中川 浩輔		
指 導 主 任	高山 榮一		
主 任	仲鉢 正志		
〃	千葉 守		
研究主幹(生産システムグループ)	江部 成彦	上 席 普 及 指 導 員	西海 豊顕
主 査（栽培システム）	梶山 努	主 任 普 及 指 導 員	高松 聡
研 究 主 任	原 圭祐	主 査（地域支援）	成松 靖
〃	吉田 邦彦		
研 究 職 員	加藤 弘樹		
主 査（経営）	白井 康裕		
研 究 主 任	山田 洋文		

※ 場長及び総務課職員は、北海道総合政策部科学IT振興局研究法人室から派遣

※ 十勝農業試験場技術普及室職員の所属は、北海道農政部技術普及課（十勝農業試験場駐在）

(2) 転入、採用及び昇格者

職 名	氏 名	発令年月日	備 考
研究部長	高宮 泰宏	H25. 4. 1	上川農業試験場から
主査（調整）	小林 英範	H25. 4. 1	畜産試験場から
研究主任	小林 聡	H25. 4. 1	北見農業試験場から
研究主任	品田 博史	H25. 4. 1	上川農業試験場から
指導主任	高山 榮一	H25. 4. 1	北見農業試験場から
研究主幹	江部 成彦	H25. 4. 1	北見農業試験場から
主査	酒井 治	H25. 4. 1	根釧農業試験場から

(3) 転出者等

職 名	氏 名	発令年月日	備 考
研究部長	奥村 正敏	H25. 4. 1	中央農業試験場へ
主査（調整）	清水 文憲	H25. 4. 1	空知総合振興局へ
研究主査	萩原 誠司	H25. 4. 1	北見農業試験場へ
主任	早坂 敏昭	H25. 4. 1	北見農業試験場へ
研究主幹	原 仁	H25. 4. 1	根釧農業試験場へ
主査	谷藤 健	H25. 4. 1	食品加工研究センターへ
研究主任	中道 浩司	H25. 4. 1	中央農業試験場へ

6. 今年度設置（廃止）した施設等

(単位：円)

施設の名称	事業内容	事業量	金額
豆類低温育種実験室遮光カーテン改修工事	遮光カーテンの張替え	一式	986,790
てん菜分析室修繕工事	露出鉄筋再塗装	一式	1,890,000
農機具庫修繕工事	柱脚腐食部改修	一式	1,785,000
豆類高能率乾燥施設修繕工事	2階部のエキスパントメタル床張り	一式	1,050,000
土壌作物診断室柵制作工事	試料柵の増設	一式	455,700
ガラス室・附属準備室解体工事	建物解体	一式	400,050
土壌物置解体工事	建物解体	一式	173,250

7. 新たに購入した主な備品

(単位：円)

品名	規格	数量	金額
トラクター	ニューホランド [®] T6050(130ps)	1台	8,300,000
ブームスプレーヤ	1,500L 速度連動散布装置付き	1台	3,000,000
貨物兼乗用自動車	キャラバン 2500D・ロング [®] ・4WD・9人乗	1台	2,894,938
純水製造装置	WA710	1台	1,173,900
人工気象器	MLR-352-PJ	1台	1,056,300
顕微鏡用デジタルカメラ	DP26-D	1台	847,140
カルチベーター	5畝型 ADK-5	1台	285,600
高圧洗浄機	エンジン式 MKF-2015	1台	285,000
モバイル GIS	モバイル GIS バンド・ソフトウェア	1式	280,350
電動スクリーン	STP-120VM-TRW1-WG103	1式	262,500
乾熱滅菌器	SK601	1台	250,950
葉緑素計	SPAD-502Plus	2台	239,400
プロジェクター	EB-1776W 天井つり下式	1台	236,250
統計解析ソフト	10.0.2 windows 版	1個	220,500
AED	HEART START FRx	1台	220,385
充電式クレーンスケール	最大秤量 2,000 kg 最小表示 1 kg	1台	196,350
ながいもバケット(特注 PC20 用)	ミニショベル PC20MR-3 用	1台	157,500

8. 予算執行

(1) 収入

(単位：円)

科目	当初予算額	最終予算額	決算額	増減
依頼試験手数料	925,000	925,000	1,555,320	630,320
農産物売払収入	2,291,000	2,291,000	1,756,949	▲534,051
不用品売払収入	2,000	2,000	0	▲2,000
法人財産使用料等	460,000	460,000	362,959	▲97,041
共同研究費負担金	0	2,000,001	2,000,000	▲1
国庫受託研究収入	23,543,000	28,014,000	28,014,000	0
道受託研究収入	649,000	2,617,000	2,617,000	0
その他受託研究収入	63,168,000	66,872,000	66,872,000	0
道受託事業収入	0	12,000	4,950	▲7,050
循環資源利用促進基金収入	1,300,000	1,300,000	0	▲1,300,000
施設整備費補助金収入	0	7,014,000	7,014,000	0
合計	92,338,000	111,507,001	110,197,178	▲1,309,823

※ 事業費支弁人件費振替額を含む。

(2) 支出

(単位：円)

科 目	当初予算額	最終予算額	決算額	繰越額	残 額
戦略研究費	5,331,000	7,542,000	6,417,653	1,124,347	0
重点研究費	5,610,000	5,610,000	5,357,117	252,883	0
職員研究奨励費	0	1,516,000	1,516,000	0	0
経常研究費	13,183,000	13,183,000	11,997,805	0	1,185,195
研究開発推進費	0	108,000	108,000	0	0
依頼試験費	569,000	569,000	569,000	0	0
技術普及指導費	224,000	277,000	277,000	0	0
研究用備品整備費	0	15,251,238	15,251,238	0	0
目的積立金活用事業費(経常)	0	1,925,000	1,924,998	0	2
維持管理経費	53,265,000	63,335,855	62,794,125	0	541,730
運営経費	9,513,000	9,418,000	7,366,125	0	2,051,875
共同研究費	0	2,000,000	2,000,000	0	0
国庫受託研究費	20,341,000	24,812,000	24,812,000	0	0
道受託研究費	649,000	2,617,000	2,617,000	0	0
その他受託研究費	58,814,000	63,520,000	63,520,000	0	0
道受託事業費	0	12,000	4,950	0	7,050
循環資源利用促進基金事業費	0	1,300,000	1,186,541	0	113,459
施設整備費補助金	0	7,014,000	7,014,000	0	0
合 計	167,499,000	220,010,093	214,733,552	1,377,230	3,899,311

※ 事業費支弁人件費振替額を除く。

9. 圃場の作付及び設備・機械の整備管理

(1) 圃場作付 試験圃作付図(8頁)のとおり

(2) 契約職員(農業技能員・農作業補助員・研究補助員)の延べ雇用人数(豆類G関係分)

月別	延人数	作 業 内 容
4月	67	播種準備、播種、移植、その他圃場管理雑役
5月	262	播種、移植、その他圃場管理雑役
6月	423	補植、間引き、除草、調査補助、その他圃場管理雑役
7月	445	除草、調査補助、防風林下草刈り、収穫、その他圃場管理雑役
8月	425	除草、草刈り、交配補助、調査補助、収穫、脱穀、その他圃場管理雑役
9月	455	調査補助、収穫、脱穀、播種、その他圃場管理雑役
10月	614	調査補助、収穫、脱穀、分析補助、その他雑役
11月	459	収穫物調査補助、脱穀、分析補助、その他雑役
12月	491	収穫物調査補助、脱穀、分析補助、その他雑役
1月	263	収穫物調査補助、温室内播種、分析補助、その他雑役
2月	209	収穫物調査補助、温室内管理、分析補助、その他雑役
3月	236	種子選粒、苗床播種、分析補助、その他雑役
合計	4,349	

(3) 圃場整備

排水不良な圃場についてハーフソイラーによる土壌硬盤層破碎、明渠の施行など土地改良を行った。

(4) 設備及び農業機械等の整備、修理

試験の円滑な実施のため、研究用設備や用具の補修及び工作、また、主に冬期には農作業機械及び試験用機械の点検修理、改良を行った。

B 作 況

1. 気象の概要

(1) 前年9月から根雪始めまでの経過

- 9月：平均気温は総じてかなり高く、降水量は少なかった。日照時間は下旬に少なかった。
- 10月：平均気温は上中旬は高く、下旬は平年並であった。降水量は中下旬に多く、日照時間は上旬に少なかった。
- 11月：平均気温は上中旬は高く、下旬は低かった。降水量は多く、11月7日には134.5mmの降水があった。日照時間は上中旬は少なかった。

(2) 根雪期間中の経過

- 12月：平均気温は上旬はやや低く、中下旬はかなり低かった。降水量は上中旬は多く、12月4日には75mmの降水があり、下旬は少なかった。日照時間はほぼ平年並であった。
- 1月：平均気温は上中旬はかなり低く、下旬は平年並であった。降水量は上中旬は少なかった。日照時間は上旬に多かった。
- 2月：平均気温は上旬は高く、中下旬はかなり低かった。降水量は上旬は多く、下旬は少なかった。日照時間はほぼ平年並みであった。
- 3月：平均気温は上中旬は平年並で、下旬は低かった。降水量は下旬は少なかった。日照時間は下旬に多かった。

(3) 根雪終わり以降の経過

- 4月：平均気温は上旬は高く、下旬はやや低かった。降水量は上旬は多く、下旬は少なかった。日照時間は中旬は多かった。
- 5月上旬：平均気温はかなり低く、降水量は平年並であった。日照時間は平年並であった。
- 5月中旬：平均気温はかなり低く、降水量は平年並であった。日照時間は少なかった。
- 5月下旬：平均気温はかなり高く、降水量は少なかった。日照時間は多かった。
- 6月上旬：平均気温は高く、降水量は少なかった。日照時間は多かった。
- 6月中旬：平均気温は高く、降水量は平年並であった。日照時間は少なかった。

- 6月下旬：平均気温はかなり低く、降水量はやや多かった。日照時間は平年並であった。
- 7月上旬：平均気温はかなり高く、降水量は少なかった。日照時間は多かった。
- 7月中旬：平均気温は高く、降水量は少なかった。日照時間は多かった。
- 7月下旬：平均気温は平年並で、降水量は多かった。日照時間は少なかった。
- 8月上旬：平均気温は低く、降水量は少なかった。日照時間はやや少なかった。
- 8月中旬：平均気温は高く、降水量は少なかった。日照時間は少なかった。
- 8月下旬：平均気温はやや低く、降水量は多かった。日照時間は少なかった。
- 9月上旬：平均気温は低く、降水量は少なかった。日照時間は少なかった。
- 9月中旬：平均気温は平年並で、降水量は多く、9月16日には99mmの降水があった。日照時間は平年並であった。
- 9月下旬：平均気温、降水量、日照時間は平年並であった。
- 10月上旬：平均気温はかなり高く、降水量と日照時間はともに平年並であった。
- 10月中旬：台風26号の影響により、10月16日に平年より28日早い降雪があった。平均気温はやや低く、降水量は多かった。日照時間は平年並であった。
- 10月下旬：平均気温はやや高く、降水量は多かった。日照時間は平年並であった。
- 11月上旬：平均気温は平年並で、降水量は少なかった。日照時間は平年並であった。

平均気温は、平年に比べて、5月上中旬はかなり低く経過したが、5月下旬から6月中旬は高温であった。6月下旬は低温となったものの、7月上中旬は高く経過した。以降も、8月上旬は低温、中旬は高温で、9月上旬は低温であったほかは、ほぼ平年並で経過した。よって、この期間の平均気温の積算値は平年より4.7℃高い2,494.7℃となり、平年比100%であった。

日照時間は、平年に比べて、5月下旬、6月上旬及び7月上中旬は多く、5月中旬、6月中旬及び7月下旬から9月上旬にかけては少なく経過した。よって、この期

間の日照時間の積算値は、平年より44.4時間少ない595.2時間で、平年比93%であった。

降水量は、5月下旬から6月上旬が少なく、6月中下旬は平年並からやや多かった。7月下旬、8月下旬及び9月中旬は多かったが、7月上中旬、8月上中旬、9月上旬は少なかった。よって、この間の降水量の積算値は平年より57.7mm少ない507.0mmとなり、平年比90%であった。

以上から、本年の農耕期間（5月上旬から9月下旬）の気象概要は、5月上中旬は低温、5月下旬から6月上旬にかけてと7月上中旬は高温多照少雨、8月上旬及び9月上旬は低温少雨、8月中旬は高温少雨、7月下旬、8月下旬及び9月中旬は多雨で経過し、積算の平均気温は平年並、日照時間及び降水量は平年より少なく経過した。

表 B-1 農耕期間における気象観測値の積算値（芽室アメダス）

		最高気温 (°C)	最低気温 (°C)	平均気温 (°C)	日照時間 (時)	降水量 (mm)
4月中旬～ 11月上旬	本年	4,069	2,081	2,986	906	767
	平年	4,126	1,990	2,975	949	733
	比較	-57	91	11	-43	34
5月～9月	本年	3,272	1,872	2,495	595	507
	平年	3,303	1,813	2,490	640	565
	比較	-31	59	5	-44	-58

表 B-2 季節表（十勝農試）

項目	根雪始 (月日)	根雪終 (月日)	積雪期間 (日)	降雪終 (月日)	耕鋤始 (月日)	晩霜 (月日)	初霜 (月日)	無霜期間 (日)	降雪始 (月日)
本年	H24. 11. 26	H25. 4. 5	131	5. 6	4. 16	5. 8	10. 19	163	10. 16
平年	12. 4	4. 8	126	4. 27	4. 18	5. 17	10. 8	143	11. 13
比較(日)	-8	-3	+5	+9	-2	-9	11	20	-28

表 B-3 気象表

年月	旬	平均気温(°C)			最高気温(°C)			最低気温(°C)			降水量(mm)			降水日数(日)			日照時間(hr)			地温(°C)		
		本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較
平成24年	9月	20.9	18.6	2.3	25.4	23.5	1.9	17.4	14.6	2.8	46.0	69.7	-23.7	2.0	4.3	-2.3	43.1	39.7	3.4	23.4	20.9	2.5
	中旬	22.4	16.7	5.7	26.8	22.0	4.8	18.9	12.0	6.9	5.5	33.3	-27.8	4.0	2.9	1.1	44.8	47.0	-2.2	23.9	19.6	4.3
	下旬	15.6	13.5	2.1	18.6	18.7	-0.1	13.0	8.7	4.3	29.5	39.6	-10.1	7.0	3.3	3.7	19.0	48.3	-29.3	19.3	16.6	2.7
10月	上旬	13.4	11.9	1.5	18.2	17.4	0.8	8.9	7.1	1.8	49.0	47.3	1.7	1.0	3.2	-2.2	38.0	48.6	-10.6	16.6	14.5	2.1
	中旬	10.9	9.7	1.2	15.5	15.6	-0.1	6.1	4.2	1.9	38.5	12.7	25.8	4.0	2.3	1.7	56.1	53.1	3.0	13.2	12.2	1.0
	下旬	7.9	7.5	0.4	12.6	12.7	-0.1	2.7	2.4	0.3	71.0	22.6	48.4	5.0	3.1	1.9	55.4	53.5	1.9	10.2	9.5	0.7
11月	上旬	8.2	5.9	2.3	10.8	11.1	-0.3	5.9	1.0	4.9	187.0	16.6	170.4	6.0	2.8	3.2	28.6	48.7	-20.1	9.3	7.4	1.9
	中旬	3.8	2.5	1.3	7.0	7.3	-0.3	0.9	-1.8	2.7	47.5	27.2	20.3	6.0	2.6	3.4	29.0	49.5	-20.5	6.4	4.5	1.9
	下旬	-1.0	0.4	-1.4	2.7	4.9	-2.2	-4.5	-4.0	-0.5	29.5	21.1	8.4	4.0	3.0	1.0	45.9	52.4	-6.5	1.8	2.1	-0.3
12月	上旬	-2.9	-2.4	-0.5	0.9	2.2	-1.3	-7.4	-7.6	0.2	90.0	16.8	73.2	6.0	2.3	3.7	42.7	49.3	-6.6	0.7	0.8	-0.1
	中旬	-8.1	-5.9	-2.2	-1.6	-0.5	-1.1	-14.8	-11.7	-3.1	20.5	11.4	9.1	4.0	3.5	0.5	47.2	49.5	-2.3	0.7	0.3	0.4
	下旬	-9.3	-6.2	-3.1	-3.9	-1.2	-2.7	-15.2	-12.1	-3.1	8.0	18.1	-10.1	3.0	3.0	0.0	59.5	52.4	7.1	0.8	0.2	0.6
平成25年	1月	-12.0	-7.3	-4.7	-6.1	-1.6	-4.5	-18.9	-13.3	-5.6	2.0	8.4	-6.4	2.0	1.9	0.1	69.3	54.1	15.2	0.8	0.2	0.6
	中旬	-11.6	-8.7	-2.9	-5.0	-2.9	-2.1	-19.3	-15.1	-4.2	0.0	5.3	-5.3	0.0	2.0	-2.0	63.1	57.0	6.1	0.7	0.1	0.6
	下旬	-8.5	-8.1	-0.4	-2.4	-2.5	0.1	-15.9	-14.7	-1.2	9.5	8.4	1.1	4.0	3.3	0.7	63.9	64.9	-1.0	0.5	0.1	0.4
2月	上旬	-6.4	-7.9	1.5	-1.5	-2.1	0.6	-11.7	-14.4	2.7	19.0	2.6	16.4	4.0	1.5	2.5	53.6	63.8	-10.2	0.6	0.1	0.5
	中旬	-9.2	-7.0	-2.2	-3.6	-1.3	-2.3	-15.9	-13.6	-2.3	4.0	7.5	-3.5	3.0	1.9	1.1	64.3	60.4	3.9	0.7	0.1	0.6
	下旬	-9.4	-5.9	-3.5	-2.0	-0.2	-1.8	-17.4	-12.8	-4.6	0.0	11.2	-11.2	0.0	3.3	-3.3	59.7	52.3	7.4	0.7	0.1	0.6
3月	上旬	-4.2	-4.1	-0.1	1.2	1.3	-0.1	-9.4	-10.2	0.8	17.0	14.0	3.0	3.0	2.3	0.7	60.6	68.0	-7.4	0.7	0.2	0.5
	中旬	-1.2	-1.2	0.0	3.9	3.6	0.3	-7.6	-6.6	-1.0	12.0	11.3	0.7	5.0	2.0	3.0	59.4	62.5	-3.1	0.5	0.2	0.3
	下旬	-0.8	0.5	-1.3	3.7	5.3	-1.6	-6.0	-4.3	-1.7	8.5	17.0	-8.5	3.0	3.1	-0.1	93.6	73.6	20.0	0.4	0.5	-0.1
4月	上旬	4.2	2.6	1.6	8.8	8.2	0.6	-0.4	-2.6	2.2	63.5	13.7	49.8	3.0	2.5	0.5	56.7	63.1	-6.4	4.1	1.8	2.3
	中旬	4.4	4.7	-0.3	9.5	10.4	-0.9	-0.2	-0.2	0.0	17.5	16.9	0.6	6.0	2.8	3.2	62.1	51.2	10.9	6.9	4.9	2.0
	下旬	6.4	7.1	-0.7	11.8	13.0	-1.2	1.3	1.8	-0.5	23.0	34.8	-11.8	4.0	4.2	-0.2	46.9	53.8	-6.9	7.9	7.8	0.1
5月	上旬	6.3	9.9	-3.6	12.1	16.3	-4.2	1.6	4.2	-2.6	42.0	42.1	-0.1	4.0	3.7	0.3	56.1	58.7	-2.6	8.2	10.9	-2.7
	中旬	8.0	10.4	-2.4	12.3	16.5	-4.2	4.6	5.1	-0.5	34.0	30.0	4.0	6.0	4.0	2.0	20.7	50.9	-30.2	10.8	12.0	-1.2
	下旬	14.2	11.6	2.6	21.4	17.2	4.2	8.8	6.8	2.0	4.0	42.1	-38.1	2.0	4.1	-2.1	61.3	46.4	14.9	15.3	13.7	1.6
6月	上旬	15.2	13.8	1.4	22.7	20.2	2.5	9.6	8.9	0.7	0.5	16.1	-15.6	1.0	3.3	-2.3	68.9	47.5	21.4	18.2	16.0	2.2
	中旬	16.4	15.2	1.2	20.8	20.6	0.2	12.7	10.8	1.9	34.5	33.2	1.3	4.0	3.4	0.6	15.0	36.6	-21.6	18.9	17.6	1.3
	下旬	14.9	17.3	-2.4	21.0	22.8	-1.8	10.7	12.6	-1.9	28.0	21.4	6.6	4.0	3.4	0.6	41.3	46.1	-4.8	19.0	19.5	-0.5
7月	上旬	21.1	17.1	4.0	26.5	22.1	4.4	16.6	13.3	3.3	14.0	37.6	-23.6	2.0	3.1	-1.1	51.3	32.3	19.0	22.2	20.1	2.1
	中旬	19.0	17.8	1.2	24.9	22.4	2.5	14.2	14.2	0.0	1.5	49.4	-47.9	1.0	3.3	-2.3	52.1	30.8	21.3	22.2	20.6	1.6
	下旬	19.2	19.3	-0.1	22.3	24.3	-2.0	16.9	15.3	1.6	76.5	33.5	43.0	8.0	3.4	4.6	14.8	39.9	-25.1	21.8	21.7	0.1
8月	上旬	20.3	21.7	-1.4	25.1	26.9	-1.8	16.9	17.5	-0.6	16.0	43.7	-27.7	3.0	3.7	-0.7	32.0	39.7	-7.7	22.9	23.1	-0.2
	中旬	21.8	20.5	1.3	25.9	25.2	0.7	19.0	16.7	2.3	13.5	47.3	-33.8	5.0	3.5	1.5	23.0	33.5	-10.5	23.8	22.9	0.9
	下旬	18.7	19.4	-0.7	22.8	24.3	-1.5	15.3	15.3	0.0	68.5	31.4	37.1	8.0	3.7	4.3	31.8	46.7	-14.9	21.8	21.8	0.0
9月	上旬	17.6	18.9	-1.3	21.1	23.7	-2.6	14.7	14.9	-0.2	35.0	71.9	-36.9	7.0	4.2	2.8	26.0	40.1	-14.1	20.0	21.2	-1.2
	中旬	17.6	17.4	0.2	22.8	22.6	0.2	12.8	13.0	-0.2	107.0	30.3	76.7	3.0	3.0	0.0	49.8	44.9	4.9	19.5	20.1	-0.6
	下旬	13.8	13.7	0.1	19.2	18.7	0.5	8.7	9.2	-0.5	31.5	34.7	-3.2	2.0	3.7	-1.7	51.1	45.5	5.6	16.9	17.0	-0.1
10月	上旬	13.9	11.9	2.0	18.7	17.4	1.3	9.0	7.1	1.9	46.5	39.7	6.8	4.0	2.7	1.3	47.1	49.0	-1.9	15.9	14.7	1.2
	中旬	9.1	9.9	-0.8	14.1	15.8	-1.7	4.6	4.5	0.1	94.5	17.0	77.5	5.0	2.7	2.3	50.7	54.2	-3.5	11.6	12.3	-0.7
	下旬	8.4	7.7	0.7	12.5	12.9	-0.4	4.8	2.5	2.3	59.5	24.4	35.1	3.0	3.1	-0.1	47.5	53.4	-5.9	9.9	9.7	0.2
11月	上旬	6.1	6.4	-0.3	11.9	11.4	0.5	0.9	1.7	-0.8	19.0	35.2	-16.2	4.0	3.7	0.3	56.2	47.8	8.4	7.7	7.9	-0.2
	中旬	2.0	2.8	-0.8	7.0	7.5	-0.5	-2.5	-1.4	-1.1	15.0	28.9	-13.9	3.0	2.9	0.1	59.2	45.5	13.7	3.7	4.9	-1.2

- (備考) 1 平年値は前10か年平均。
2 観測値は、十勝農試マメダスのデータ。
4 平均気温は毎時24回の平均値。
5 地温は地下10cm、毎時24回の平均値。

2. 当場の作況

(1) 秋播小麦 作況：良

事由：播種は平年より3日早い9月20日に行い、出芽期は5日早い9月26日であった。10月20日の生育は、平均気温が高く経過したため葉数、茎数が多かった。融雪期は3日早く、越冬後の雪腐病及び冬損の被害は僅かであった。融雪後の生育は平年並みに推移し、出穂期は平年より1日遅い6月10日であった。7月に入り高温に推移したため、成熟は進み、成熟期は平年より4日

早く、登熟日数は平年より5日短かった。千粒重は3.3g軽かったが、1穂粒数が平年より4.8粒多く、子実重は742kg/10a（平年比118%）と多収であった。リットル重は平年より9g軽く、2.2mm篩上率は平年より3.8ポイント低い90.9%であった。検査等級は平年より優った。

以上のことから、本年の作況は良である。

表 B-4 十勝農試における平成25年度の秋播小麦作況調査成績

品種名 項目/年次	きたほなみ			
	本年	平年	比較	
播種期(月日)	9.20	9.23	△3	
出芽期(月日)	9.26	10.1	△5	
起生期(月日)*	4.5	-	-	
出穂期(月日)	6.10	6.9	1	
成熟期(月日)	7.21	7.25	△4	
葉数(枚)	10月20日	4.1	3.2	0.9
	11月15日*	5.8	-	-
草丈 (cm)	10月20日	27.8	18.2	9.6
	5月20日	42.0	44.1	2.1
	6月20日	100.2	94.8	5.4
茎数 (本/㎡)	10月20日	635	457	178
	11月15日*	1750	-	-
	起生期*	2373	-	-
	5月20日	1173	1204	△31
	6月20日	739	767	△28
成熟期	稈長(cm)	89	90	△1
	穂長(cm)	8.8	8.4	0.4
	穂数(本/㎡)	735	707	28
一穂粒数(粒/穂)	28.5	23.7	4.8	
子実重(kg/10a)	742	631	111	
同上対平年比(%)	118	100	18	
リットル重(g)	804	813	△9	
2.2mm篩上率(%)	90.9	94.7	△3.8	
千粒重(g)	35.5	38.8	△3.3	
検査等級	1	2上		

平年値は、前7カ年中、平成24年(豊作年)、22年(凶作年)を除く5カ年平均。(年次は収穫年)

△は平年より早、少、短を表す。*は越冬前後の生育を示すが、平年値が無いため本年分のみ示した。

(2) 大豆 作況：やや良

事由：播種期は平年より1日遅かったが、その後は高温に経過したため、出芽期は4～5日早かった。その後も気温は6月下旬を除き概ね平年並から高かったため、開花始は平年より2～5日早かった。生育は旺盛で主茎長、主茎節数は平年を大きく上回って経過し、7月下旬以降、降雨による倒伏が発生した。8月下旬～9月上旬は平年より降水日数が多く、日照時間が少なかったため成熟期は平年より2～3日遅れた。着莢数は「ユキホマレ」でやや多いが、「トヨムスメ」ではやや少なく、「ト

ヨハルカ」で平年並となった。また、登熟期間が平年より4～8日長くなり、いずれの品種とも百粒重が平年よりかなり重かった。一莢内粒数はいずれの品種とも平年並であった。これらのことから、子実重は平年比104～112%の多収となった。

屑粒率は平年よりやや高かった。検査等級は「ユキホマレ」、「トヨムスメ」では平年並、「トヨハルカ」は平年を上回った。

以上のことから、本年の作況はやや良である。

表 B-5 十勝農試における平成25年度の大豆作況調査成績

品種名 項目/年次	ユキホマレ			トヨムスメ			トヨハルカ			
	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較	
播種期(月日)	5.21	5.20	1	5.21	5.20	1	5.21	5.20	1	
出芽期(月日)	6.1	6.5	△4	5.31	6.5	△5	6.1	6.5	△4	
出芽率(%)	98.1	85.2	12.9	98.6	83.7	14.9	97.9	83.0	14.9	
開花始(月日)	7.12	7.14	△2	7.11	7.16	△5	7.14	7.16	△2	
成熟期(月日)	9.24	9.22	2	10.4	10.1	3	10.3	9.30	3	
主 茎 長 (cm)	6月20日	13.0	10.8	2.2	10.6	9.9	0.7	11.2	10.5	0.7
	7月20日	77.6	51.4	26.2	64.0	47.7	16.3	67.6	49.1	18.5
	8月20日	95.0	64.3	30.7	82.5	67.8	14.7	88.1	65.9	22.2
	9月20日	93.6	62.8	30.8	83.5	67.7	15.8	89.3	65.8	23.5
	成熟期	92.8	61.8	31.0	80.0	65.3	14.7	89.3	64.7	24.6
主 茎 節 数 (節)	6月20日	3.5	2.8	0.7	3.2	2.9	0.3	3.5	2.7	0.8
	7月20日	11.3	9.5	1.8	10.2	8.9	1.3	10.8	9.4	1.4
	8月20日	12.0	10.0	2.0	10.7	10.1	0.6	11.6	10.3	1.3
	9月20日	11.6	10.0	1.6	10.8	10.0	0.8	11.7	10.5	1.2
	成熟期	11.7	10.2	1.5	10.8	10.2	0.6	11.7	10.6	1.1
分 枝 数 (本/株)	7月20日	4.2	3.4	0.8	4.8	4.4	0.4	2.4	2.2	0.2
	8月20日	5.4	4.3	1.1	6.0	5.0	1.0	4.3	2.8	1.5
	9月20日	4.4	4.0	0.4	4.9	4.6	0.3	3.1	2.8	0.3
	成熟期	3.5	3.6	△0.1	4.3	4.5	△0.2	3.5	2.7	0.8
着 莢 数	8月20日	87.9	70.6	17.3	73.7	73.8	△0.1	73.7	61.6	12.1
	9月20日	69.5	70.0	△0.5	62.3	67.0	△4.7	62.7	60.1	2.6
	成熟期	66.5	63.2	3.3	62.3	65.8	△3.5	61.1	60.9	0.2
一莢内粒数	1.75	1.71	0.04	1.73	1.71	0.02	1.88	1.86	0.02	
子実重(kg/10a)	384	361	23	402	385	17	397	353	44	
百粒重(g)	44.3	37.8	6.5	46.3	40.5	5.8	45.4	40.1	5.3	
屑粒率(%)	2.6	0.8	1.8	3.7	0.7	3.0	7.0	2.1	4.9	
品質(検査等級)	2下	2下	—	3上	3上	—	2上	2下	—	
子実重対平年比(%)	106	100	6	104	100	4	112	100	12	

備考1) 平年値は、前7か年中、平成24年(最豊作年)及び21年(最凶作年)を除く5か年平均である。

2) △は平年より早、少、短、軽、低を表す。

3) 着莢数は次のとおりである。8月20日現在: 莢の長さ2cm以上、9月20日現在および成熟期: 稔実莢。

4) 子実重と百粒重は水分15%換算。

(3) 小豆 作況：平年並

事由：播種期は平年並で、出芽期は高温により平年より2～5日早かった。その後も高温に経過したため初期生育は旺盛で、主茎長、本葉数、分枝数ともに平年を上回り、開花始は平年より2～3日早かった。8月下旬以降の多雨により、すべての品種で倒伏が発生した。

成熟期は平年より1～5日早く、主茎長は平年より長かった。「きたろまん」は、着莢数及び百粒重が平年を

上回り、子実重は平年対比 120%となった。「エリモシヨウズ」は、着莢数は平年並、一莢内粒数及び百粒重が平年をやや下回ったため、子実重は平年対比 96%とやや低収となった。「アカネダイナゴン」は平年並であった。品質は屑粒率が低く、検査等級は平年より優った。

以上のことから、本年の作況は平年並である。

表 B-6 十勝農試における平成25年度の小豆作況調査成績

品種名 項目/年次	きたろまん			エリモシヨウズ			アカネダイナゴン			
	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較	
播種期(月日)	5.24	5.24	0	5.24	5.24	0	5.24	5.24	0	
出芽期(月日)	6.5	6.10	△5	6.6	6.10	△4	6.7	6.9	△2	
開花始(月日)	7.21	7.24	△3	7.21	7.24	△3	7.23	7.25	△2	
成熟期(月日)	9.12	9.14	△2	9.13	9.18	△5	9.21	9.22	△1	
主茎長 (cm)	6月20日	5.8	3.6	2.2	6.3	4.1	2.2	6.3	4.2	2.1
	7月20日	32.7	16.6	16.1	35.4	18.1	17.3	29.9	16.5	13.4
	8月20日	79.8	62.4	17.4	89.5	68.7	20.8	113.8	66.7	47.1
	9月20日	83.5	66.9	16.6	91.6	73.5	18.1	117.1	73.7	43.4
	成熟期	83.5	66.9	16.6	91.6	74.3	17.3	117.1	73.8	43.3
本葉数 (枚)	6月20日	1.5	0.6	0.9	1.6	0.6	1.0	1.5	0.6	0.9
	7月20日	8.3	6.4	1.9	8.6	6.5	2.1	8.9	6.8	2.1
	8月20日	13.6	11.4	2.2	14.6	12.9	1.7	16.5	14.0	2.5
主茎節 数(節)	9月20日	13.0	12.8	0.2	13.9	14.1	△0.2	17.0	14.8	2.2
	成熟期	13.0	12.8	0.2	13.9	14.1	△0.2	17.0	14.7	2.3
分枝数 (本/株)	7月20日	6.3	3.5	2.8	5.4	3.5	1.9	5.4	3.6	1.8
	8月20日	6.6	4.0	2.6	5.8	4.5	1.3	6.4	5.4	1.0
	9月20日	5.9	3.2	2.7	4.8	4.0	0.8	5.9	4.8	1.1
	成熟期	5.9	3.2	2.7	4.8	3.9	0.9	5.9	4.8	1.1
着莢数 (莢/株)	8月20日	86.0	56.2	29.8	92.0	52.3	39.7	90.1	50.5	39.6
	9月20日	58.2	51.5	6.7	58.8	57.3	1.5	73.9	67.9	6.0
	成熟期	58.2	51.5	6.7	58.8	57.1	1.7	73.9	67.1	6.8
一莢内粒数(粒)	5.97	6.28	△0.31	5.83	6.06	△0.23	3.83	3.95	△0.12	
総重(kg/10a)	683	590	93	639	677	△38	705	611	94	
子実重(kg/10a)	435	363	72	356	370	△14	372	377	△5	
百粒重(g)	16.5	15.4	1.1	13.6	14.0	△0.4	17.8	17.5	0.3	
屑粒率(%)	1.3	2.8	△1.5	1.8	5.1	△3.3	2.4	5.2	△2.8	
品質(検査等級)	2上	3中	-	2上	3中	-	3中	4上	-	
子実重対平年(%)	120	100		96	100		99	100		

備考 1) 平年値は、前7か年中、平成22年(凶作年)及び21年(豊作年)を除く5か年平均である。

2) 着莢数は、8月20日現在が莢の長さが3cm以上、9月20日現在および成熟期が稔実莢を示す。

3) △は平年より早、少、短、軽、低を表す。

(4) 菜豆 作況：不良

事由：播種期は平年より1日遅かったが、出芽期はその後の高温により1～2日早かった。開花始は7月上旬の高温により平年より早かったものの、成熟期は7月下旬以降寡照であったことから平年並であった。

手亡類では、一莢内粒数および百粒重はほぼ平年並だったが、着莢数が平年を下回り、子実重は平年比94%とやや低収であった。金時類では、着莢数は平年をやや下回ったが、百粒重は重く、「福勝」は子実重が平年比108%とやや多収であった。一方「大正金時」は、一莢内粒

数が平年を下回り、子実重は平年比95%とやや低収であった。

倒伏の発生および成熟期までの連続的な降雨（8月下旬から9月上旬）により、手亡類では発芽粒および腐敗粒が生じ、金時類では色流れ粒が多発した（屑粒の約8～9割）。このため、屑粒率は共に平年を大きく上回り、検査等級は平年を大きく下回った。

以上のことから、本年の作況は不良である。

表 B-7 十勝農試における平成25年度の菜豆作況調査成績

品種名 項目/年次	雪 手 亡			大 正 金 時			福 勝			
	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較	
播種期(月日)	5.28	5.27	1	5.28	5.27	1	5.28	5.27	1	
出芽期(月日)	6.7	6.8	△1	6.8	6.10	△2	6.9	6.10	△1	
開花始(月日)	7.17	7.21	△4	7.10	7.11	△1	7.10	7.12	△2	
成熟期(月日)	9.15	9.15	0	9.1	9.2	△1	9.7	9.7	0	
草丈 (cm)	6月20日	7.4	6.5	0.9	10.5	9.7	0.8	10.2	9.5	0.7
	7月20日	47.9	54.0	△6.1	60.0	46.9	13.1	58.2	48.3	9.9
	8月20日	53.4	72.6	△19.2	58.0	52.5	5.5	59.9	56.7	3.2
	9月20日	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	成熟期	56.4	69.7	△13.3	55.9	52.0	3.9	57.2	56.1	1.1
葉数 (枚)	6月20日	1.9	0.9	1.0	1.3	0.9	0.4	1.7	1.0	0.7
	7月20日	6.1	7.2	△1.1	3.3	3.6	△0.3	3.7	3.8	△0.1
	8月20日	6.2	7.7	△1.5	3.6	3.7	△0.1	3.9	3.8	0.1
	9月20日	-	-	-	-	-	-	-	-	-
主莖節数 (節)	成熟期	8.1	9.3	△1.2	5.7	5.6	0.1	5.7	5.8	△0.1
	7月20日	9.5	9.3	0.2	7.6	8.0	△0.4	8.1	7.8	0.3
分枝数 (本/株)	8月20日	8.7	8.7	0.0	6.7	6.2	0.5	5.8	5.8	0.0
	9月20日	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	成熟期	7.9	8.1	△0.2	6.5	5.6	0.9	5.3	5.2	0.1
着莢数 (莢/株)	8月20日	31.7	35.1	△3.4	16.8	17.5	△0.7	16.0	17.0	△1.0
	9月20日	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	成熟期	28.1	31.5	△3.4	15.7	16.5	△0.8	14.8	15.7	△0.9
一莢内粒数	4.39	4.41	△0.02	2.65	2.99	△0.34	2.60	2.70	△0.10	
総重(kg/10a)	589	645	△56	566	548	18	618	550	68	
子実重(kg/10a)	340	363	△23	275	291	△16	317	294	23	
百粒重(g)	33.3	32.3	1.0	77.3	70.6	6.7	91.9	84.6	7.3	
屑粒率(%)	19.5	8.1	11.4	38.2	9.2	29.0	52.6	10.0	42.6	
品質(検査等級)	4上	3上	-	4中	2下	-	外	3上	-	
子実重対平年比(%)	94	100	-	95	100	-	108	100	-	

備考 1) 平年値は、前7か年中、平成23年(豊作年)及び18年(凶作年)を除く5か年平均である。

ただし、9月20日の各調査項目の平年値は、年次により成熟期後となるため算出していない。

2) △は平年より早、少、短、軽、低を表す。

3) 屑粒は、病害粒、変色粒(色流れ)、未熟粒、等を含む。

(5) 馬鈴しょ 作況：やや良

事由：植付は、平年並の5月10日に行った。植え付け後低温に経過したため、萌芽期は1～4日遅かった。5月下旬は高温に経過したため生育は回復し、茎長は平年並に推移し、開花始も平年並となった。塊茎の肥大は、萌芽期の遅れの大きかった「男爵薯」では平年並に推移したが、「トヨシロ」「コナフブキ」は平年を上回って推移した。枯凋期は「男爵薯」では平年に比べ12日遅か

ったが、「トヨシロ」「コナフブキ」では平年並であった。上いも重は、「男爵薯」で平年比100%、上いも数が平年を上回った「トヨシロ」「コナフブキ」でそれぞれ103%、115%と平年並から上回った。でん粉価は平年をやや上回った。「コナフブキ」のでん粉重は平年比117%であった。

以上のことから、本年の作況はやや良である。

表 B-8 十勝農試における平成25年度の馬鈴しょ作況調査成績

品種名 項目/年次	男爵薯			トヨシロ			コナフブキ			
	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較	
植付期(月日)	5.10	5.10	0	5.10	5.10	0	5.10	5.10	0	
萌芽期(月日)	6.3	5.30	4	6.3	6.2	1	6.2	6.1	1	
開花始(月日)	6.29	6.30	△1	7.2	7.1	1	6.29	6.30	△1	
枯凋期(月日)	9.12	8.31	12	9.8	9.7	1	9.27	9.28	△1	
茎長 (cm)	6月20日	23.7	25.9	△2.2	22.1	17.0	5.1	36.8	25.0	11.8
	7月20日	57.0	55.4	1.6	72.9	71.0	1.9	87.2	85.0	2.2
	8月20日	58.2	57.6	0.6	73.9	75.0	△1.1	90.1	102.0	△11.9
茎数 (本/株)	6月20日	3.8	3.7	0.1	3.6	3.0	0.6	4.8	3.0	1.8
	7月20日	4.0	4.2	△0.2	4.2	3.0	1.2	6.7	3.0	3.7
7月20日 上いも重(kg/10a)	2,266	2,293	△27	2,250	2,065	185	2,053	1,681	372	
上いも重(kg/10a)	4,140	4,152	△12	4,357	4,248	109	4,331	3,634	697	
8月20日 同上平年比(%)	100	100	0	103	100	3	119	100	19	
でん粉価(%)	15.6	15.0	0.6	16.3	16.0	0.3	21.5	20.0	1.5	
収穫期	上いも数(個/株)	10.5	12.1	△1.6	10.9	10.0	0.9	12.2	10.0	2.2
	上いも一個重(g)	90	81	9	91	103	△12	92	96	△4
	上いも重(kg/10a)	4208	4,216	△8	4385	4,244	141	4,922	4,289	633
	中以上いも重(kg/10a)	3771	3,496	275	3814	3,860	△46	—	—	
	でん粉価(%)	15.1	14.7	0.4	16.5	16.0	0.5	21.8	21.0	0.8
	でん粉重(kg/10a)	592	577	15	678	626	52	1026	879	147
	平年比 (%)	100	100	0	103	100	3	115	100	15
でん粉重	103	100	3	108	100	8	117	100	17	

備考1) 平年値は、前7か年中、平成24年(豊作年)及び平成22年(凶作年)を除く5か年平均である。

2) △は平年より早、少、短、軽、低を表す。

(6) てん菜 作況：平年並

事由：移植期は平年より5日早い4月24日であった。移植後は低温に経過し、活着後の生育は緩慢であったが、5月下旬以降高温に経過したため、生育は回復した。6月以降草丈、葉数は平年並から、やや上回り、根重は平

年並に推移した。収穫時の根中糖分は平年並であり、糖量は平年並であった。

以上のことから、本年の作況は平年並である。

表 B-9 十勝農試における平成25年度のてん菜作況調査成績

品種名 項目/年次	アーベント			リッカ(参考)			
	本年	平年	比較	本年	平年	比較	
播種期(月日)	3.18	3.17	1	3.18	3.17	1	
発芽期(月日)	3.26	3.26	0	3.25	3.25	0	
移植期(月日)	4.24	4.29	△5	4.24	4.28	△4	
収穫期(月日)	10.22	10.19	3	10.22	10.19	3	
草丈 (cm)	5月20日	5.9	6.1	△0.2	5.4	5.5	△0.1
	6月20日	42.2	33.6	8.6	41.8	35.7	6.1
	7月20日	63.4	59.3	4.1	65.6	66.9	△1.3
	8月20日	71.2	63.4	7.8	73.7	73.5	0.2
	9月20日	66.3	63.6	2.7	74.0	72.7	1.3
	10月20日	69.1	58.6	10.5	73.0	69.5	3.5
生葉数 (枚)	5月20日	5.0	5.0	0	4.7	5.1	△0.4
	6月20日	13.7	12.4	1.3	14.5	13.2	1.3
	7月20日	21.0	22.3	△1.3	19.2	19.5	△0.3
	8月20日	26.9	26.0	0.9	24.3	22.9	1.4
	9月20日	28.9	28.6	0.3	26.8	25.8	1.0
	10月20日	30.1	27.7	2.4	28.2	25.8	2.4
根重 (kg/10a)	7月20日	2,407	2,403	4	2,381	2,404	△23
	8月20日	4,723	4,883	△160	5,213	5,056	157
	9月20日	5,968	5,992	△24	6,489	6,544	△55
	10月20日	6,469	6,438	31	7,414	6,955	459
茎葉重 (kg/10a)	5,160	4,828	332	4,020	4,175	△155	
根重 (kg/10a)	6,469	6,438	31	7,414	6,955	459	
根中糖分(%)	16.85	16.94	△0.09	16.16	16.06	0.10	
糖量(kg/10a)	1,090	1,091	△1	1,198	1,117	81	
T/R比	0.80	0.75	0.05	0.54	0.60	△0.06	
平年比(%)	茎葉重	107	100	7	96	100	△4
	根重	100	100	0	107	100	7
	根中糖分	99	100	△1	101	100	1
	糖量	100	100	0	107	100	7

備考1) 平年値は、前7か年中、平成19年(豊作年)及び平成22年(凶作年)を除く5か年平均である。

2) リッカの平年値は過去4年(平成21~24年)の平均値であり、参考データとする。

3) △は平年より早、少、短、軽、低を表す。

C 試験研究及び地域支援活動の概要

研究部 豆類グループ

〔大豆育種関連〕

大豆新品種育成は、経常研究「大豆品種開発事業」（平成25～31年）および「多様な育種目標に対応した品種開発のための検定強化」（平成25年）において、障害抵抗性の複合化、豆腐加工適性の向上を中心とした63組合せの交配を行い、交配後の材料は $F_2 \sim F_3$ は主として集団育種法、 F_4 以降は系統育種法により世代を進め、また、材料の一部は F_1 の冬季温室で世代促進を行った。育成系統生産力検定予備試験には28系統を供試して収量・品質調査を行うとともに、耐冷性、耐病性検定及び系統適応性検定等を実施した。これらの中から、「十系1145号」に「十育256号」、「十系1160号」に「十育257号」の地方番号を付した。この他に、十系2系統を継続とし、新たに21系統に十系番号を付した。実用技術開発事業「食料自給率向上を目指した豆類優良品種の育成」（平成23～25年）において、生産力検定試験および各種特性検定を実施し、子葉緑でやや早、センチウレース3抵抗性の「十育252号」、やや早、着色抵抗性、センチウレース3抵抗性の「十育255号」を供試した。「十育252号」は収量性が不安定でコンバイン収穫適期が短いこと、東北産青大豆需要の置き換えが、加工適性から難しいことが明らかとなり、廃棄とした。「十育255号」は早熟で耐冷性が優れたが、収量性、豆腐破断応力に優点が認められず、廃棄とした。

〔小豆育種関連〕

小豆新品種育成は、経常研究「小豆品種開発事業」（平成25～31年）および「多様な育種目標に対応した品種開発のための検定強化」（平成25年）において、高度耐冷性や複数病害虫抵抗性を持ち、機械収穫適性、加工適性に優れる多収な小豆有望系統を育成するため、36組合せの人工交配を行ない、交配後の材料は、 F_1 世代の冬期温室利用による養成後、 $F_2 \sim F_4$ 世代を主に集団育種法（一部 F_3 世代は春季暖地による世代促進を含む）、 F_5 世代以降は系統育種法により選抜・世代を進めた。育成系統生産力検定予備試験には38系統を供試し、収量、品質の評価を行ない、併せて耐病性、耐冷性の特性検定試験、北見農試において系統適応性検定試験等を実施した。その中から9系統を継続評価、「十系1099号」を「十育166号」、「十系1151号」を「十育167号」として地方配布番号を

付した。この他新たに32系統に十系番号を付した。実用技術開発事業「食料自給率向上を目指した豆類優良品種の育成」（平成23～25年）において、生産力検定試験および各種特性検定試験を実施し、かなり早、落葉病レース1、3、茎疫病レース1、萎凋病抵抗性で開花着莢期耐冷性が“中”の普通小豆「十育160号」と、長胚軸の特性を持ち、中生で、落葉病レース1、3、萎凋病抵抗性があり、開花着莢期耐冷性が“中”の普通小豆「十育161号」、大納言で落葉病レース1、3、茎疫病レース1、3、4、萎凋病抵抗性で開花着莢期耐冷性が“中”の「十育163号」、早生で落葉病レース1、3、茎疫病レース1、3、4、萎凋病抵抗性、開花着莢期耐冷性が“中”の普通小豆「十育164号」、早の晩で落葉病レース1、3、茎疫病レース1、3、4、萎凋病抵抗性、開花着莢期耐冷性が“中”の普通小豆「十育165号」の5系統を供試した。「十育160号」は高温条件下で小粒化が著しく、加工適性評価がやや劣るため、廃棄、「十育161号」は著しく収量性が低く、挫折型の倒伏が発生し、機械収穫の優位性を発揮が難しいと判断し、廃棄とした。「十育163号」は耐倒伏性に優れ、多収で耐病性に優れる。「十育164号」は早生性が示され、耐倒伏性、に優れ、収量性、粒大は対照品種並であった。「十育165号」は成熟期が対照品種対比-4日と早く、耐倒伏性に優れ、やや多収であった。「十育163号」、「十育164号」、「十育165号」の3系統を継続評価とし、「十育160号」、「十育161号」を廃棄とした。

〔菜豆育種関連〕

「菜豆新品種育成試験」（経常研究）では良質、耐病、多収を目標に35組合せの交配を行い、 $F_2 \sim F_4$ は主として集団育種法、 F_5 以降は系統育種法によって選抜し、世代を進めた。また、 F_2 の一部は、鹿児島県で世代促進を行った。育成系統生産力検定予備試験には手亡類38系統、金時類18系統、サラダ用途向け15系統を供試し、手亡類では多収で耐倒伏性および成熟期の葉落ちに優れる「十系A421号」に「十育A63号」の地方番号を付した。金時類では中生多収で耐倒伏性に優れ、黄化病抵抗性の「十育B452号」に「十育B83号」を、サラダ向け用途では早生多収で、煮熟後の皮切れが少なく、煮熟後の粒色の濃い「十系S48号」に「十育S3号」の地方番号を付した。生産力検定試験には、手亡類では「雪手亡」対照の「十育A59号」、「十育A62号」および「絹てぼう」対

照の「十育A61号」を供試し、耐倒伏性に優れる「十育A62号」を継続検討、収量性が劣った「十育A59号」および加工適性が劣った「十育A61号」は廃棄とした。金時類では、「福勝」対照で多収の「十育B81号」および「大正金時」対照で黄化病抵抗性の「十育B82号」を供試し、両系統ともに継続検討とした。サラダ用途向けでは2系統供試し、「十育S1号」は裂開粒の多発生、「十育S2号」は莢内発芽粒の多発生により廃棄とした。

研究部 生産システムグループ

平成25年度は13課題（トラクタ及び作業機械施設の性能試験2課題を含む）を実施した。このうち本年度に成績をとりまとめたのは以下の4課題である。

「青色申告書を活用した畑作・酪農経営の経営管理手法の開発」（研究成果名：青色申告決算書を活用した地域の農業所得の解析手法）では、青色申告決算書を用いて農業所得の推移と所得変化の要因を整理する解析手法を確立した。基準年を100とした指数により所得の推移について営農類型間の比較が可能になり、収入・経費の構成要素ごとに所得の変化率に対する寄与度を算出することで、所得変化に大きな影響を及ぼした要素を特定できる。

「てんさい生産における除土積込機を活用した輸送受入システムの検討」（研究成果名：てんさいにおける専用堆積場の整備に関する効果）では、専用堆積場から搬出されたてんさいの土砂混入率は、圃場堆積時よりも低位で安定する傾向があり、積込時の作業能率も高いことを確認した。専用堆積場の整備は、圃場内での車輛の走行を伴わないため、畑の保全に結び付くとともに、その投資効率は1.0を上回るため、事業としての投資に妥当性を有していることを明らかにした。

「加工用ばれいしょの規格内率向上に向けた茎数コントロール方法の確立」（研究成果名：ばれいしょ早期培土栽培の生産安定化技術（補遺））では、平成22年指導参考事項で提示した栽植指標を現地の実作業体系においても適合させるためには、浴光催芽を励行するとともに、植付時の株間のばらつきを小さくすることが重要であることを明らかにした。さらに、茎数の安定確保を目的として、種いものエチレン又はヒートショック処理による茎数増加効果と生育促進効果について確認した。

「農作業体系における燃料消費量の評価」（研究成果名：耕うん・収穫時における簡易燃料消費量推定法）で

は、ロータリーハローとボトムプラウについて土壌の種類毎に耕うん出力と走行抵抗力を推定し、トラクタ定格出力毎の燃料消費量の推定法を開発した。耕うん作業機の旋回や収穫作業時の排出、移動など各作業工程の燃費を明らかにし、作業シミュレーションを行って圃場作業燃費の簡易推定法を提示した。

研究部 生産環境グループ

〔栽培環境研究関連〕

本年度は試験課題8課題を実施した。

新規は3課題で、「硬質秋まき小麦「つるきち」の生育特性に対応した栽培法の確立」（中央・北見農試と共同）では、「つるきち」の栽培特性に応じた高品質安定栽培法を検討するために播種を行った。「バイオエタノール蒸留残渣液（DWG）の草地および小麦後作緑肥への施用」（畜試と共同）では、DWGの小麦後作緑肥への施用法を検討した。「農地土壌温室効果ガス排出量算定基礎調査事業」では、スイートコーンを作付けし、堆肥施用の有無、残渣すき込みの有無による土壌炭素の変化の検討を行った。

継続課題は1課題で、「道産小麦の用途拡大に向けた「ゆめちから」の高品質安定生産及びブレンド指針の策定」（中央・上川農試と共同）では、超強力ブレンド用品種「ゆめちから」の栽培特性に応じた高品質安定栽培法を窒素施肥試験を中心に検討した。

本年度終了課題は4課題であった。「地球温暖化と生産構造の変化に対応できる北海道農林業の構築」は、研究成果名「子実用とうもろこしの栽培法と道央地域における輪作体系への導入効果」として中央農試、畜試と、「土着菌根菌利用による大豆栽培におけるリン酸減肥技術の開発」は「大豆作付け圃場におけるアーバスキュラー菌根菌の感染実態と前作を考慮したリン酸減肥指針」として中央農試・北農研センターと、「熟度の異なる家畜ふん堆肥の特性解明と飼料用とうもろこしに対する施用法」は、研究成果名「酪農場における堆肥舎整備後の家畜ふん堆肥等の特性と飼料用とうもろこしに対する肥効評価」として畜試と、各々成績をとりまとめ、いずれも指導参考事項と判定された。

技術体系化課題「簡易耕と診断技術による秋まき小麦の安定生産技術及び圃場傾斜均平による湿害低減技術の実証」（地域技術G、生産システムGと共同）では、池田町現地圃場における傾斜均平工事等による効果を検証

し、結果は関係者に対する説明会を行って報告した。

「肥料及び土壌改良剤の実用化試験」は、4課題を実施し、「ばれいしょに対する土壌pH調整剤「硫黄50号」の施用効果」、「小豆に対する「けい酸加里」の施用効果」「にんじんに対する「マッシュルーム廃培地」の施用効果」の3課題が指導参考事項と判定された。

土壌調査関係では、「道営土地改良事業調査地区土壌調査」として畑地土壌調査を3地区、「道営草地整備事業調査地区土壌調査」を3地区で行い、結果は総合振興局・振興局及び農政部農村計画課に報告した。

全道の土壌環境変化の傾向をモニタリングする目的で継続している「土壌機能実態モニタリング調査」は、本年度は土幌町、音更町の定点において調査を実施した。地球温暖化に関与する土壌への炭素蓄積データを全国共通の指標で調査する「全国農地土壌炭素調査」は帯広市、池田町、本別町、音更町で実施した。

また、東日本大震災により発生した福島第一原子力発電所事故による道内農地の土壌への影響を確認するため、十勝農試圃場においてモニタリング調査を実施した。

「突発および新発生病害虫の診断試験」では病虫担当と連携し、生理障害、栄養障害の観点から対応した。

〔病虫研究関連〕

「発生予察調査」による主要病害虫の発生状況は、秋まき小麦の赤さび病、ばれいしょの黒あし病、大豆のマメシクイガ、大豆および小豆の食葉性鱗翅目幼虫、てんさいのヨトウガが褐斑病が平年と比較して多かった。その他の病害虫はおおむね少から平年並みの発生であった。秋まき小麦「きたほなみ」は赤さび病の抵抗性が「やや強」であるが、本年度は全道各地で発生が認められ、今後も顕在化する懸念があることから特に注意を要する。道内では25の新発生病害虫が確認されたが、十勝管内に関係するものは、ながいものモモアカアブラムシとワタアブラムシ、だいおうのコガタルリハムシとギシギシアブラムシ、ふきのフキヒメクキモグリバエがあり、今後の発生動向に注意が必要である。

「病害虫診断試験」では156件の診断依頼に対応した。特に本年度は秋まき小麦の縞萎縮病の診断依頼が多かった。

平成25年度の一般試験研究課題は13課題である。本年度に新規に開始した試験課題は、公募型研究の「北海道の秋まき小麦地帯におけるT-2トキシン、HT-2トキシン産生菌の分布実態の解明」、受託研究の「*Microdochium nivale*による赤かび病と葉枯症状の発生に対する防除対策」（北見農試と共同）、「高温加湿空気を用いた小麦

種子消毒の実用化試験」（北見農試と共同）、「てんさいの西部萎黄病の発生生態と多発生要因の解明」および「たまねぎ直播栽培における収量安定化方策の検討」（地域技術Gと共同）である。

継続課題としては、「インゲンマメゾウムシのほ場寄生リスク低減対策」（中央農試Gと共同）では薬剤の効果や効果的な散布時期を中心に検討した。また、新たな育成系統の病害抵抗性評価試験として「気象変動に対応したコムギ縞萎縮病および赤かび病抵抗性の強化」と「ゲノム情報を豆類複合抵抗性品種の開発強化」を実施し、秋まき小麦の赤かび病と菜豆の黄化病に対する抵抗性の評価を行った。「初期世代からの馬鈴しょ疫病抵抗性品種の選抜強化」では、疫病抵抗性品種を予察ほ場で栽培し、発生の動向を調査した。

本年度完了した5課題のうち4課題を成績会議に提案し、「小麦の雪腐病に対する早期薬剤散布による効率的な防除法の確立」および「ジャガイモ黒脚病の切断刀消毒を目的としたカッティングプランター用消毒装置の処理条件」が普及推進事項に、農政部事業の「特別栽培のためのばれいしょ疫病の防除体系の確立と現地実証」および「特別栽培のための小豆病害虫の防除体系」が指導参考事項と判定された。成績会議に提案しなかった「インゲンマメゾウムシ抵抗性導入のための遺伝資源の評価および胚培養系の確立」は委託元に対して試験結果を報告した。

また、「農薬の実用化試験」では7作物の38薬剤について効果と実用性の評価を行った。十勝農試が試験を実施した殺菌剤5剤と殺虫剤1剤は実用性があると判断され指導参考事項となった。

研究部 地域技術グループ

〔畑作園芸研究関連〕

てん菜について、「輸入品種検定試験」において、9系統の耐病性、糖量等を対照品種と比較検討した。「特性検定試験」では根腐病について試験を実施した。

秋播小麦について、「奨励品種決定基本調査」において「北海262号」、「北海263号」、「北海264号」、「北見86号」、「北見89号」、「北見90号」の収量性や障害耐性等を対照品種と比較検討した。「地域適応性検定試験」では、北見農試育成17系統について適応性を検討した。「病害抵抗性・障害耐性に優れる高品質小麦開発のための検定強化」では穂発芽検定用のサンプルを作出し、北見農試での検定に供することにより育成系統の改廃の参考と

した。春播小麦では、「奨励品種決定調査」および「春まき小麦の品種選定試験」において「北見春71号」、「北見春75号」の適応性を検討した。「食料自給率向上と高品質安定生産を実現する小麦・大麦品種の開発と普及促進 中華めん・パン用小麦の道東地域での栽培特性・障害耐性の解明」では、秋まき小麦「つるさち」および春まき小麦「北見春71号」の栽培特性および低アミロ耐性を調査した。「ゆめちから」の生育特性に対応した高品質・安定栽培法の確立」では、「ゆめちから」における播種期・播種量が及ぼす影響を検討した。

馬鈴しょについては、「地域適応性検定試験」「奨励品種決定調査」及び「輸入品種等選定試験」において、17系統について試験を行い、7系統を”やや有望”、6系統を”再検討”と判定した。このうち「北育20号」はジャガイモシストセンチュウ抵抗性で多収であることから、北海道優良品種に認定された。貯蔵に関する試験では生食用馬鈴しょに対するエチレンの萌芽抑制効果に関して、「エチレン処理による生食用馬鈴しょの長期貯蔵技術」として成績会議に提出し指導参考事項に認定された。また昨年に引き続き、種いもに対するエチレン処理が茎数、いも数、一個重に与える影響について検討を行った。

ながいもについて、「十勝ブランドを目指したながいも新品種の安定生産技術開発および有望系統の評価」では、「十勝4号」の増殖性および「十勝5号」の貯蔵性について検討を開始した。「新たな商品開発に向けたやまのいも「十勝3号」の品質評価と生産技術の確立」では、「十勝3号（きたねばり）」の栽培特性を検討するとともに、一次・二次加工適性を検討し、パン、菓子、創作料理等への活用について検討を進めた。

たまねぎについて、「たまねぎ直播栽培における収量安定化方策の検討」において場内および音更町現地において実態調査および栽培試験を行い、ハエ類による食害の加害種を特定するなど一定の成果を得た。

その他、「除草剤及び生育調節剤の実用化試験」では、やまのいも2剤の効果と実用性を検討した。

〔地域支援関連〕

十勝管内の農業及び関連産業が直面する課題に迅速かつ的確に対応するため、試験研究機関、普及組織及び総合振興局が連携し、地域農業を支援する体制として設置した十勝地域農業支援会議に事務局として参画した。普及センター、関係農協等と連携して地域農業の技術的課題の的確な把握に努めるとともに、研究課題、普及課題、地域連携課題等の振り分けを行い、地域農業関係者との

コンセンサスの下に迅速な課題解決の推進を図った。

本年度、次の4課題①「簡易耕と診断技術による秋まき小麦の安定生産技術及び圃場傾斜均平による湿害低減技術の実証」、②「加工用ばれいしょの規格内率向上に向けた茎数コントロール方法の確立」、③「『きたほなみ』超多収生産技術の確立と実証」、④「道産小麦の用途拡大に向けた「ゆめちから」の高品質安定生産及びブレンド指針の策定」は、継続して取り組んだ。①は当場生産システム、生産環境両グループ、②は当場生産システムグループと、③は当場地域技術グループと、④は当場地域技術グループ、生産環境両グループと技術体系化チームを組織して行った。

D 試験研究及び地域支援活動の課題名

研究部 豆類グループ

〔大豆育種研究関連〕

1. 大豆新品種育成 (大正2年～継続)

(1) 大豆品種開発事業 (平成25～31年)

目的) 耐冷性、耐湿性、病害虫抵抗性等の各種障害抵抗性を有し、加工適性(豆腐、煮豆等)に優れた系統を選抜するための材料を養成し、新優良品種育成の基盤を作る。

(2) 多様な育種目標に対応した品種開発のための検定強化 (平成25年)

目的) 道産農産物の競争力を高めるため、効率的で精度の高い検定試験を行うことにより、優良な新品種を早期に育成する。

1) 育成系統生産力検定予備試験 (昭和27年～継続)

目的) 育成系統中、固定度の高い有望系統の生産力を検定する。

2) 加工適性に関する試験 (昭和36年～継続)

目的) 育成中の系統及び品種について子実成分、豆腐加工適性、煮豆適性を評価し、良質品種の育成に資する。

3) 品種保存 (昭和19年～継続)

目的) 大豆品種の純系ならびに種子を保存するとともに、一般特性を調査する。

(3) 食料自給率向上を目指した豆類優良品種の育成

(平成23～25年)

目的) 寒地大規模畑作地帯に適応した耐冷、多収、高品質品種を育成するため、有望系統について生育、収量、品質の特性を明らかにするとともに、耐冷性、センチウ抵抗性、低温着色抵抗性、煮豆等加工適性を明らかにする。

1) 育成系統生産力検定試験 (昭和31年～継続)

目的) 育成系統及び主要品種の生産力および諸特性を検定する。

2) 育成系統栽培特性検定試験 (昭和30年～継続)

目的) 育成系統の栽植密度に対する反応を検討する。

3) 耐冷性検定試験 (昭和39年～継続)

目的) 育成系統及び品種の低温抵抗性(開花期耐冷性、低温着色抵抗性、低温裂開抵抗性)を明らかにして、耐冷性品種の育成に資する。

4) ダイズシストセンチウ抵抗性検定試験

(昭和53年～継続)

目的) 育成系統について、シストセンチウ抵抗性を検定し、新品種の育成に資する。

2. 大豆奨励品種決定現地調査

(昭和29年～継続)

目的) 育成中の有望系統及び品種につき、諸特性及び生産力を調査し、現地における適応性を明らかにして、奨励品種決定の資料とする。

3. オホーツク地域に適した大豆耐冷性系統の選抜強化 (平成23～25年)

目的) 生産拡大が期待されるオホーツク地域向けの大豆品種育成を促進するため、同地域でも安定生産可能な耐冷性の選抜を強化する。

4. 大豆有望系統の豆腐加工適性評価とタンパク質サブユニット改変による加工適性の向上

(平成23～25年)

目的) 豆腐用優良品種の早期開発を目指して、中央農試農産品質Gで、少量サンプルによる豆腐硬さ及び豆乳粘度を評価し選抜を行う。

5. ゲノム情報を活用した豆類複合抵抗性品種の開発強化 (平成25～27年)

目的) これまで開発したDNAマーカーを積極的に利用することによって豆類の耐病虫性・障害抵抗性を効率的に選抜する。

6. シストセンチウ抵抗性 *rhg3* 関連マーカーの開発と感受性品種への複合抵抗性導入

(平成23～26年)

目的) 既に開発したダイズシストセンチウ・レース1抵抗性マーカー (*Rhg4*, *rhg1*, *rhg2*) に加え、*rhg3* 座関連マーカーを開発し、既存品種の耐病虫害抵抗性を強化した品種・系統を育成する。

7. ダイズの収量構成要素関連遺伝子の単離と機能解明、育種的利用ならびにダイズ等のゲノム研究基盤の整備と利用 (平成25～29年)

目的) 着莢数に関与する草型形質(半無限伸育、長花梗)について、収量向上に対する有効性を明らかにする。

8. ダイズ裂開粒の発生機構解明および裂開抵抗性マーカーの開発 (平成25～29年)

目的) 生産拡大が期待されるオホーツク地域向けの大豆品種育成を促進するため、同地域で問題となっている裂開粒について、育種に利用可能なDNAマーカーを開発するとともに実用的な耐冷性系統を選抜する。

9. ゲノム情報を活用した、ダイズシストセンチュウと低温着色に強い大豆の開発 (平成25年)

目的) 「スズヒメ」と「トヨハルカ」の後代から選抜した“*Rhg4*座がレース1抵抗性型かつ*I*座が着色抵抗性型”の組換え系統について、表現型の確認および遺伝子座周辺領域の解析を行う。

〔小豆育種研究関連〕

1. 小豆新品種育成 (昭和29年～継続)

(1) 小豆品種開発事業 (平成25～31年)

目的) 耐冷性、耐病虫性が強く、機械収穫適性、高品質で製あん適性に優れた多収品種を育成する。

(2) 多様な育種目標に対応した品種開発のための検定強化 (平成25年)

目的) 道産農産物の競争力を高めるため、効率的で精度の高い検定試験を行うことにより、優良な新品種を早期に育成する。

1) 予備選抜試験 (昭和34年～継続)

目的) 育成系統について小規模に生産力を検定する

2) 育成系統生産力検定予備試験 (昭和34年～継続)

目的) 育成系統のうち固定度の高い系統について生産力を予備的に検定する。

(3) 食料自給率向上を目指した豆類優良品種の育成

(平成23～25年)

目的) 北海道に適応した耐冷、多収、高品質品種を育成するため、有望系統について生育、収量、品質の特性を

明らかにするとともに、耐冷性、耐病性(落葉病、萎凋病、茎疫病)、製あん特性等加工適性を明らかにする。

1) 育成系統生産力検定試験 (昭和36年～継続)

目的) 育成系統の生産力を検定する。

2) 育成系統アズキ落葉病抵抗性検定試験

(昭和56年～継続)

目的) 育成系統のうち固定度の高い有望系統について、アズキ落葉病(レース1及び2)抵抗性を検定する。

3) 小豆の耐冷性に関する試験 (昭和42～継続)

目的) 低温育種実験室で小豆有望系統の開花期頃の長期低温に対する耐冷性を検定する。

4) 小豆の加工適性に関する試験 (平成23～25年)

目的) 育成した有望系統について、煮熟特性や製あん適性を検定する。

2. 小豆奨励品種決定調査 (昭和46年～継続)

目的) 有望な系統及び品種について現地における適性を明らかにして、奨励品種決定の資とする。

3. 小豆の耐冷性高度化を目指した選抜とその遺伝様式の解明 (平成24～26年)

目的) 遺伝資源由来の不良農業特性を除いた開花着莢期高度耐冷性を有する系統を選抜する。さらに効率的な選抜手法開発のための高度耐冷性とその他不良形質に関する連鎖地図を作成する。

4. 小豆におけるダイズシストセンチュウ抵抗性遺伝資源の特性解明と育種の加速化

(平成24～26年)

目的) 小豆のダイズシストセンチュウ抵抗性の遺伝様式を解明すると共に抵抗性の特性を明らかにする

5. オホーツク地域に適した早生耐冷性小豆品種育成のための生育特性解明と選抜強化

(平成25～27年)

目的) オホーツク地域向け早生小豆の生育特性を明らかにし、早生選抜基準を策定する。早生耐冷性系統を現地において選抜し、安定的に早生で収量性の改善された小豆有望系統を育成する。

6. 道央・道南地域に適した小豆の茎疫病圃場抵抗性を含めた耐病性と加工適性の向上

(平成23～25年)

目的) 道産小豆の安定生産のため道央、道南地域向けの茎疫病圃場抵抗性を含む土壌病害抵抗性を有した規格内収量が高く、外観品質と加工適性の優れた普通小豆および大納言小豆の選抜を強化する。

7. DNAマーカー選抜による小豆の土壌病害複合抵抗性系統の選抜強化

(平成23～25年)

目的) 小豆育種の更なる効率化のため、アズキ落葉病抵抗性DNAマーカーによる有望系統の選抜、アズキ萎凋病抵抗性の新たなマーカー開発を行ない、アズキ茎疫病圃場抵抗性に関する遺伝様式と機差を明らかにする。

8. 小豆における生育初期耐冷性の検定条件の設定

(平成25～26年)

目的) 生育初期耐冷性検定を行なうための栽培条件を検討し、生育を安定させ、検定条件を設定し検定法を確立する。

9. 道産小豆の安定生産のための高品質多収新品種の耐病性、耐冷性の向上

(平成25～27年)

目的) 新たな特性の導入を目指す育種材料について初期世代では落葉病抵抗性の選抜を行ない、中期世代で開花着莢期耐冷性検定や現地耐冷性検定を行なう。

10. 豆類育成系統の普及見込み地帯における実規模試験栽培

(平成25年)

目的) 豆類の有望系統について普及見込み地帯において実規模の試験栽培、生産物の調製を行ない、普及性を明らかにする。

〔菜豆育種研究関連〕

1. 菜豆新品種育成試験 (昭和29年～継続)

(1) 良質、耐病、多収品種育成試験

目的) 良質、多収、耐病性の品種を育成する。

(2) 育成系統生産力検定試験

目的) 育成系統の生産力を検定する。

(3) 品種及び育成系統の栽培特性検定試験

目的) 品種及び育成系統の栽培条件を異にする場合の適

応性を検定する。

(4) 炭そ病抵抗性検定試験

目的) 育成系統の炭そ病抵抗性を検定する。

2. 菜豆奨励品種決定調査 (昭和46年～継続)

目的) 有望な育成系統について、現地における適応性を明らかにして奨励品種決定の資とする。

3. 菜豆のサラダ用加工特性の解明と加工適性に優れる品種開発の強化

(平成25～27年)

目的) 種皮色特性および皮切れに関連する特性を解明し、皮切れ簡易評価法を開発する。中期世代系統の加工適性選抜を行う。

4. 手亡類の機械収穫適性向上を目指した遺伝資源の草型評価

(平成25～27年)

目的) 遺伝資源および育成系統の草型を評価し、耐倒伏性および収量性に優れる手亡型草型の特性を明らかにするとともに、有望遺伝資源を選定する。

5. インゲンマメゾウムシ抵抗性導入のための遺伝資源の評価および胚培養系の確立

(平成25年)

目的) 道内で発生するインゲンマメゾウムシに対し、いんげんまめ近縁種である G40199 が持つ抵抗性が有効であるかを明らかにする。また海外で報告されている ICA pijao を用いた胚培養技術を利用することで、G40199 との種間交雑個体を安定的に獲得する。

〔豆類栽培研究関連・他〕

1. 雑豆の生産安定に向けた耐病性、障害耐性品種早期育成のための世代促進技術の効率化

(平成25～27年)

目的) 冬期温室、および春季暖地における生育環境を改善し、人工交配や F1 世代養成、世代促進における生育期間短縮とともに増殖率の向上を目指す。

2. 市場評価の高い小豆、菜豆新品種育成のための加工適性調査

(平成25年)

目的) 小豆、菜豆における育成系統の製あん適性、煮熟適性を調査することにより、優れた加工適性を有する有望系統を育成する。

研究部 生産システムグループ

〔栽培システム研究関連〕

1. 農作業体系における燃料消費量の評価

(平成23～25年)

目的) 農作業におけるエネルギーコストや農業分野が排出する温暖化ガス発生量推定の基礎となる燃料消費量を作業負荷条件と燃料消費量の関係から推定する手法を開発する。

2. 雑草の発生密度を考慮した効果的な除草技術の開発

(平成23～26年)

目的) 畑作地帯における雑草発生密度や発生草種の実態から雑草管理の目標値を明らかにするとともに、この目標値を活用した合理的な除草体系を提示する。また機械除草の効果を高める手法について検討する。

3. 農業機械におけるシンプル化と情報化・高度化を両立する通信制御共通化技術の開発

(平成23～25年)

目的) 機械式作業機と通信制御技術を活用した農業機械との作業精度の差や利便性を検証するとともに、通信制御技術を活用した作業機の導入が作物生産や労働時間に与える影響を検討し、通信制御技術の共通化による効果の検証を行う。

4. 加工用ばれいしょの規格内率向上に向けた茎数コントロール方法の確立

(平成23～25年)

目的) 加工用馬鈴しょの規格内率向上に向けた茎数コントロール方法を確立する。また、全粒種いも生産に向けた歩留まり向上技術を検討し、加工用馬鈴しょ生産の安定化及び省力化に資する。

5. てんさい生産における除土積込機を活用した輸送受入システムの検討

(平成24～25年)

目的) 国内産糖の低コスト化に向けて、除土積込機を活用した輸送受入システムの実現可能性を検討する。

6. 生育履歴情報を活用した可変施肥システムの開発

(平成25～26年)

目的) 畑作物の圃場内における生育のばらつきを軽減し生産安定化を図るため、生育センサによる生育マップ等の履歴情報を活用した基肥の可変施肥システムを開発する。

7. トラクタ及び作業機械施設の性能試験

(昭和53～継続)

目的) 新規に道内に導入されるトラクタ、作業機、施設などの性能を明らかにし、導入上の参考に供する。

平成25年度：普通型コンバイン(小麦)、普通型コンバイン(大豆)、X線異物検査装置(小豆)、計3機種。

〔経営研究関連〕

1. 青色申告書を活用した畑作・酪農経営の経営管理手法の開発

(平成23～25年)

目的) 本道の畑作・酪農を代表する十勝地域において、畑作経営と酪農経営で生じた所得変化の程度とその要因を経営全体の視点から明らかにする。同時に、ここで用いた解析手順を整理することで、青色申告書の解析マニュアルを策定する。

2. 戸別所得補償制度下における水田作・畑作経営の規模拡大に向けた経営指標の策定

(平成24～26年)

目的) 北海道の主要水田作地帯と畑作地帯を対象に、現状の経営耕地規模における戸別所得補償制度導入の影響を評価する。さらに、大規模水田作経営モデルと大規模畑作経営モデルを構築し、個別所得補償制度下における規模拡大の推進に向けた個別経営体の経営指標を策定する。

3. 農業用廃プラスチックの再利用に関する研究

(平成24～26年)

目的) 芽室町をモデルケースとして、長いもネットの地域内利用に向けて、サーマルリサイクルシステムの経済性と導入条件を明らかにする。

4. てんさいの安定生産に向けた適正な圃場管理指針の策定

(平成24～26年)

目的) てんさいの生産性格差の程度と要因を解明し、省力かつ安定生産を可能とする圃場管理のあり方を検討する。また、その経済効果と安定生産に向けた指針を提示するとともに、適正な圃場管理のための支援方策を検討

する。

5. 経済・雇用・環境の影響評価が可能な市町村産業連関分析手法の確立

(平成25～27年)

目的) 農業をはじめとした各産業の営みが市町村における経済・雇用・環境に与える影響評価を可能にする産業連関分析手法を確立する。

研究部 生産環境グループ

〔栽培環境研究関連〕

(施肥法改善と品質向上試験)

1. 子実用とうもろこしの低コスト省力栽培技術

(平成21～25年)

目的) 十勝地域の気象条件に適した子実用とうもろこし品種に求められる特性を明らかにするとともに、子実用として最適な栽培法を検討する。

2. 土着菌根菌利用による大豆栽培におけるリン酸減肥技術の開発

(平成23～25年)

目的) 道東の火山性土畑において、土着アーバスキュラー菌根菌 (AM 菌根菌) 利用によるダイズのリン吸収促進効果を示すとともに、リン酸減肥栽培技術を開発する。

3. 熟度の異なる家畜ふん堆肥の特性解明と飼料用とうもろこしに対する施用法

(平成23～25年)

目的) 畑酪地帯において堆肥利用場面の多い飼料用とうもろこしについて、熟度の異なる家畜ふん堆肥の窒素利用率を明らかにする。

4. 道産小麦の用途拡大に向けた「ゆめちから」の高品質安定生産及びブレンド指針の策定

(平成24～26年)

目的) 「ゆめちから」の生育特性に応じた安定的栽培法を明らかにし、用途別評価基準値を満たすための播種期、播種量、窒素施肥法等を提示する。

5. 硬質秋まき小麦「つるきち」の生育特性に対応した栽培法の確立

(平成25～27年)

目的) 「つるきち」の安定多収、適正タンパク質含有率が確保できる栽培法を確立する。また、圃場の生産性に対応した窒素施肥設計ツールを提示する。

6. バイオエタノール蒸留残渣液 (DWG) の草地および小麦後作緑肥への施用

(平成25～27年)

目的) バイオエタノール蒸留残渣液の利用拡大のため、草地および小麦後作緑肥への施用法を検討する。

(新農業資材の実用化試験)

7. 肥料及び土壌改良剤

(昭和55年～継続)

目的) 畑作物に対する新肥料・土壌改良剤の施用効果と実用性を検討する。本年度は4種類の肥料について実施した。

(土壌調査)

8. 土壌機能実態モニタリング調査 (1) 定点調査

(平成11年～継続)

目的) 農業の基盤である土壌環境の変動を全国規模で把握し、土壌資源管理の資とする。

9. 農地土壌温室効果ガス排出量算定基礎調査事業

(平成25～32年)

目的) 国際指針に準じた温室効果ガスの吸収量算定方式に基づく土壌データ収集のために、土壌炭素の貯留量と営農管理による変動実態について明らかにする。

10. 道営土地改良事業調査地区土壌調査

(昭和47年～継続)

目的) 道営土地改良事業調査地区について、適切な土地及び土壌改良指針を提示するため、土壌調査を実施する。

11. 道営草地整備事業調査地区土壌調査

(平成23年～継続)

目的) 道営草地整備事業調査地区について、草地造成あるいは更新に当たり適切な改良方策、改良資材投入量を提示するため、土壌調査を実施する。

12. 農地における放射性物質モニタリング調査

(平成25年)

目的) 福島第一原子力発電所事故による放射性物質の道内農地への影響を確認するため、土壌モニタリング調査を実施する (分析は道立衛生研、公表は道農政部)。

(農作物病害虫診断試験)

13. 突発および新発生病害虫の診断試験

(1) 生理障害診断 (昭和50年～継続)

目的) 突発的に発生した農作物の生育異常や生育障害の診断を行い、その対策を検討する。

〔病虫研究関連〕

(植物防疫事業)

1. 病害虫発生予察調査 (昭和16年～継続)

目的) 指定及び指定外病害虫について発生予察法の確立を図るとともに、病害虫の発生情報を病害虫防除所に提供し、病害虫防除の適正化を図る。

(一般病害虫試験)

2. 道産小麦の需要を拡大する品質向上・安定化技術の開発促進 3. 高品質低コスト安定生産のための栽培技術開発 (平成22～24年、未了分)

目的) 秋まき小麦で主に問題となる雪腐病(雪腐黒色小粒菌核病、雪腐大粒菌核病)について、早期薬剤散布の防除効果の検証と不安定要因の解析を行い、さらに効果を安定させるための対策技術の検討を行う。

3. 道産小麦の需要を拡大する次世代品種の開発促進と生産安定化 2) 日本めん用等小麦の開発促進と生産安定化 (1) 気象変動に対応したコムギ縞萎縮病および赤かび病抵抗性の選抜強化

(平成25～27年)

目的) コムギ縞萎縮病、赤かび病抵抗性がともに“やや強”の抵抗性を有する系統の選抜を強化する。

4. 道産小麦の需要を拡大する品質向上・安定化技術の開発促進 2) 日本めん用等小麦の開発促進と生産安定化 (3) *Microdochium nivale*による小麦の赤かび病と葉枯症状の発生に対する防除対策

(平成25～27年)

目的) クレソキシムメチル耐性赤かび病菌(*M.nivale*)に対して効果の高い薬剤の探索および葉枯症状の発生要因解明と対策法の検討を行い、赤かび病の多発に対応した効果的な防除体系の確立を行う。

5. 北海道の秋まき小麦地帯におけるT-2トキシン、HT-2トキシン産生菌の分布実態の解明

(平成25～29年)

目的) 十勝・網走地方を中心とした秋まき小麦地帯における小麦のT-2トキシン、HT-2トキシン汚染に関する*Fusarium*属菌(赤かび病菌)の分布実態を明らかにする。

6. 高温加湿空気を用いた小麦種子消毒の実用化試験

(平成25～26年)

目的) 高温加湿空気を用いた種子消毒技術の紅色雪腐病に対する防除効果を明らかにするとともに、秋まき小麦における実用性を評価する。

7. ジャガイモ黒脚病の切断刀消毒を目的としたカッティングプランター用消毒装置の処理条件

(平成23～25年)

目的) カッティングプランター搭載用マレイン酸処理装置の消毒効果を検討する。さらに、ばれいしょの生育や収量に対する影響を加味したうえで、最適な処理条件を設定する。

8. 初期世代からの馬鈴しょ疫病抵抗性系統の選抜強化

(平成24～27年)

目的) 疫病抵抗性について、初期世代からの効率的な選抜を行い抵抗性系統を開発する。疫病菌優先系統のモニタリングを行うとともに、抵抗性有望系統・母本的能力を確認する。

9. インゲンマメゾウムシのほ場寄生リスク低減対策

(平成24～26年)

目的) 栽培ほ場における殺虫剤散布の実効性を検証して対策を講じるとともに、色彩選別記による選別効率を調査して、本種による被害粒発生を防止する。

10. ゲノム情報を活用した豆類複合抵抗性品種の開発強化

(平成25～27年)

豆類グループの項に記載

11. てんさいの西部萎黄病の発生生態と多発生要因の解明

(平成25～27年)

目的) 本病の初発時の多発生圃場を特定するとともに一次媒介虫主要種を特定し、媒介虫の越冬環境を調査して本病に対する対策を講じるための参考とする。また、生

産現場における聞き取り調査により多発生要因を特定するとともに、感染時期と発病時期および収量の関係を再整理する。

12. インゲンマメゾウムシ抵抗性導入のための遺伝資源の評価および胚培養系の確立 (平成25年)

豆類グループの項に記載

13. たまねぎ直播栽培における収量安定化方策の検討 (平成25～27年)

地域技術グループの項に記載

(農作物病害虫診断試験)

14. 突発および新発生病害虫の診断試験

(昭和50年～継続)

目的) 突発または新発生病害虫の診断を行い、適切な対策を提示して被害を最小限に止める。

(新農業資材の実用化試験)

15. 殺菌剤・殺虫剤 (昭和45年～継続)

目的) 各種病害虫に対する新殺菌剤・殺虫剤の防除効果と実用性を検討する。

(クリーン農業推進事業)

16. 特別栽培のための小豆病害虫の防除体系

(平成23～25年)

目的) 小豆の病害虫及び雑草に対して化学農薬を5割削減した際のリスクと可能性を検討する。

17. 特別栽培のためのばれいしょ疫病の防除体系の確立と現地実証 (平成23～25年)

目的) 疫病の感受性品種において化学合成農薬を慣行レベルに対し5割以上削減した減農薬防除技術を開発する。

研究部 地域技術グループ

〔畑作園芸研究関連〕

(てん菜品種改良に関する試験)

1. てん菜輸入品種検定試験 (平成21～25年)

(1) 生産力検定試験

目的) てん菜輸入品種の特性並びに生産力検定を行い、

品種選定上の資料とする。

(2) 根腐病抵抗性検定試験

目的) 有望な輸入品種・系統について、根腐病抵抗性を検定し、品種選定上の資とする。

(麦類品種改良に関する試験)

2. 畑作物地域適応性検定試験 (秋まき小麦)

(平成15～継続)

目的) 育成された有望系統について、生産力その他の諸特性を調査し、地域における適応性を検討する。

3. 道産小麦の需要を拡大する次世代品種の開発促進と生産安定化 (平成25～27年)

1) パン・中華めん用小麦の開発促進支援

(2) パン・中華めん用小麦の雨害等耐性強化

①人工降雨処理による穂発芽耐性の選抜強化

目的) 育成系統の耐穂発芽性を検定し、新品種育成の資料とする。

4. 麦類奨励品種決定調査

(1) 春まき小麦奨励品種決定基本調査 (昭和44年～継続)

目的) 春まき小麦の育成系統について、生産力を検定し、奨励品種決定の資料とする。

(2) 秋まき小麦奨励品種決定基本調査 (昭和29年～継続)

目的) 秋まき小麦の育成系統について、生産力を検定し、奨励品種決定の資料とする。

(3) 秋まき小麦奨励品種決定現地調査 (昭和28年～継続)

目的) 秋まき小麦の育成系統について、適応性を検定し、奨励品種の資料とする。

5. 食料自給率向上と高品質安定生産を実現する小麦・大麦品種の開発と普及促進

中華めん・パン用小麦の道東地域での栽培特性・障害耐性の解明

(平成23～25年)

目的) 育成系統の栽培特性と低アミロ耐性を調査し、新品種の速やかな普及を図る。

6. 道産小麦の用途拡大に向けた「ゆめちから」の高品質安定生産及びブレンド指針の策定

(平成24～26年)

(1) 「ゆめちから」の生育特性に対応した高品質・安定栽培法の確立

目的) 「ゆめちから」の生育特性に応じた安定的栽培法を明らかにし、用途別評価基準値を満たすための播種期、播種量、窒素施肥法等を提示する。生産環境 G と協力分担。

(新優良品種普及促進事業)

7. 麦類新優良品種普及促進事業

(昭和40年～継続)

目的) 奨励品種候補とみなされる有望系統について、新品種決定と同時に種子を供給できるように増殖する。

(馬鈴しょ品種改良に関する試験)

8. 馬鈴しょ地域適応性検定試験

(平成13年～継続)

目的) 育成系統について、当地方における適応性を検定し、優良品種決定上の参考にする。

9. 馬鈴しょ輸入品種等選定試験 (平成18～22年)

(1) 生産力検定試験及び現地試験

目的) 輸入品種等について、十勝管内における適応性を検定し、優良品種決定のための資料とする。

10. 馬鈴しょ奨励品種決定調査 (昭和50年～継続)

目的) 育成系統について、十勝管内における適応性を検定し、優良品種決定のための資料とする。

(馬鈴しょ栽培法改善と貯蔵に関する試験)

11. 新規萌芽抑制資材・エチレンに関する試験

(平成20～25年)

目的) 2008年に特定防除資材の保留資材として認められた「エチレン」について、萌芽抑制効果・チップカラーへの影響を調査し、馬鈴しょの長期貯蔵における萌芽抑制技術の実用化に向けた検討を行う。

12. エチレン処理による生食用馬鈴しょの長期貯蔵技術の開発

(平成22～25年)

目的) 北海道産生食用馬鈴しょの安定供給と需要拡大のため、エチレン処理条件下の貯蔵により萌芽を抑制し、高品質な生食用馬鈴しょの出荷期間を延長するための技

術を開発する。

13. 加工用馬鈴しょの規格内率向上に向けた茎数コントロール法の確立

(平成22～25年)

「生産システムグループの項に記載」

14. 長期貯蔵性に優れたポテトチップ用馬鈴しょ品種の開発強化

(平成23～27年)

目的) 芽の伸長抑制による製品生産コストの低減に効果が見られるエチレンを利用した貯蔵システムへの適応性を有望系統について評価する。

(野菜の品種改良に関する試験)

15. 十勝ブランドを目指したながいも新品種の安定生産技術開発および有望系統の評価

(平成25～27年)

目的) ながいも新品種「十勝4号」の増殖法を示すとともに、その特性を活かした高品質・低コスト安定栽培技術を開発することにより、普及を促進する。また、有望系統「十勝5号」の貯蔵性および春掘り適性を明らかにし、高貯蔵性品種としての可能性を評価する。

(野菜の栽培法改善と品質向上に関する試験)

16. 新たな商品開発に向けたやまのいも「十勝3号」の品質評価と生産技術の確立

(平成24～26年)

目的) 「きたねばり」の栽培、貯蔵におけるねばりやその他の物性、化学性の変化を明らかにし、ながいものねばりを上回る目標値(130RVU)をクリアする高品質栽培法を確立する。また、食産業と協力しながら新たな商品開発を図る。

17. たまねぎ直播栽培における収量安定化方策の検討

(平成25～27年)

目的) たまねぎ直播栽培における最適な株立ち数を明らかにするとともに、最大の不安定要因であるハエ類被害軽減方策を検討することにより収量安定化を図り、産地へのたまねぎ直播栽培導入を推進する。

(新農業資材の実用化試験)

18. 除草剤及び生育調節剤

(昭和31年～継続)

目的) 畑作物及び園芸作物に対する各種除草剤及び生育調節剤の実用性を検討する。

〔技術体系化課題〕

1. 加工用ばれいしょの規格内率向上に向けた茎数コントロール方法の確立 (平成22～25年)

「生産システムグループの項に記載」

2. 大豆・麦等生産体制緊急整備事業

簡易耕と診断技術による秋まき小麦の安定生産技術及び圃場傾斜均平による湿害低減技術の実証

(平成23～25年)

目的)簡易耕と土壌・生育診断技術による秋まき小麦「きたほなみ」の省力安定生産技術を実証する。また、圃場傾斜均平施工後作のてん菜において、湿害低減効果を実証する。

3. 「きたほなみ」超多収生産技術の確立と実証

(平成23～25年)

目的)大規模畑作地帯の主要作物である秋まき小麦「きたほなみ」の超多収栽培技術を確立、実証、普及することにより、さらなる安定多収生産と収益性の向上を図る。

4. 道産小麦の用途拡大に向けた「ゆめちから」の高品質安定生産及びブレンド指針の策定

(平成23～25年)

「生産環境グループの項に記載」

E 試験研究成果の公表

1. 普及事項及び参考事項

平成25年度北海道農業試験会議(成績会議)において、当年度とりまとめた試験成績について、普及、研究、行政に提供される事項が決定された。そのうち、当場が担当または分担した提出課題は次のとおりである。(農業資材・農業機械性能調査関係課題を除く)

(1) 普及奨励事項

(2) 普及推進事項

- 1) 青色申告決算書を活用した地域の農業所得の解析手法
(生産システムグループ)
- 2) 小麦の雪腐黒色小粒菌核病および雪腐大粒菌核病に対する殺菌剤の残効性と防除時期
(生産環境グループ)
- 3) ジャガイモ黒あし病の切断刀伝染に対するカッティングプランター用マレイン酸噴射装置の消毒効果
(生産環境グループ)

(3) 指導参考事項

- 1) ばれいしょ早期培土栽培の生産安定化技術(補遺)
(生産システムグループ)
- 2) 耕うん・収穫時における簡易燃料消費量推定法
(生産システムグループ)

- 3) 農業機械性能調査(普通型コンバイン(小麦)、X線異物検査装置(小豆))

(生産システムグループ)

- 4) 子実用とうもろこしの栽培法と道央地域における輪作体系への導入効果

(生産環境グループ)

- 5) 大豆作付け圃場におけるアーバスキュラー菌根菌の感染実態と前作を考慮したリン酸減肥指針

(生産環境グループ)

- 6) 酪農場における堆肥舎整備後の家畜ふん堆肥等の特性と飼料用とうもろこしに対する肥効評価

(生産環境グループ)

- 7) 小豆栽培における化学農薬半減技術

(生産環境グループ)

- 8) 特別栽培のためのばれいしょの疫病に対する防除体系

(生産環境グループ)

- 9) エチレン処理による生食用馬鈴しょの長期貯蔵技術

(地域技術グループ)

(4) 研究参考事項

(5) 行政参考事項

- 1) てんさいにおける専用堆積場の整備に関する効果
(生産システムグループ)

2. 論文、資料及び刊行物印刷

(1) 研究論文

7) 研究部 豆類グループ

- Hiroshi Shinada・Natsuko Iwata・Takashi Sato・Kenji Fujino. Genetical and morphological characterization of cold tolerance at fertilization stage in rice. *Breeding Science* 63(2) p197-204 (2013).
- Hiroshi Shinada・Toshio Yamamoto・Eiji Yamamoto・Kiyosumi Hori・Junichi Yonemaru・Kenji Fujino. Historical changes in population structure during rice breeding programs in the northern limit of rice cultivation. *Theoretical and applied genetics* 127(4) p995-1004 (2014).
- Hiroshi Shinada・Natsuko Iwata・Takashi Sato・Kenji Fujino. QTL pyramiding for improving of cold tolerance at fertilization stage in rice. *Breeding Science* 63(5) p483-488 (2014).

4) 研究部 生産システムグループ

- 原 圭祐・稲野一郎. 光学式選別機を組み込んだ小麦の効率的な調製体系. *農業食料工学会誌*. 76(1) : 92-98 (2014)
- 白井康裕・鳥越昌隆・大波正寿・柳田大介・大平純一・成松靖. 生産費データを用いた技術評価プロセス—たまねぎ直播栽培技術を事例として—. *農業経営研究*. 51(1) : 65 - 70(2013)
- 山田洋文. てんさい栽培における省力技術の導入が畑作経営に与える影響. *フロンティア農業経済研究*. 第17巻第1号 : 29-37 (2013)

6) 研究部 生産環境グループ

- Y. Hayashi, T. Kozawa, D. Aiuchi, M. Tani, M. Koike. A selective medium to isolate airborne spores of *Microdochium nivale*, causing winter wheat scab. *Eur. J. Plant Pathol.*, Vol.138:247-256(2014)

1) 研究部 地域技術グループ

- 岩崎暁生・荻野瑠衣・妹尾吉晃. 北海道中央部のテンサイほ場におけるモモアカアブラムシ発生消長と西部萎黄病発病状況. *北日本病虫研報*. 64:227-231 (2013)
- 岩崎暁生・荻野瑠衣・小野寺鶴将. 北海道におけるアズキゾウムシの野外寄生の確認と産卵時期の推定. *北日本病虫研報*. 64:171-175 (2013)

- Yazaki, T., Hirota, T., Iwata, Y., Inoue, S., Usuki, K., Suzuki, T., Shirahata, M., Iwasaki, A., Kajiyama, T., Araki, K., Takamiya, Y., Maezuka, K. Effective killing of volunteer potato (*Solanum tuberosum* L.) tubers by soil frost control using agrometeorological information—An adaptive countermeasure to climate change in a cold region. *Agricultural and Forest Meteorology*. 182-183 : 91-100 (2013)

(2) 学会講演及び口頭研究発表

7) 研究部 豆類グループ

- 小林 聡・山口直矢・品田博史、三好智明. 北海道ダイズ育成系統における成熟期を考慮した収量性評価. 日本育種学会・日本作物学会 北海道談話会講演会 (2013).
- 平岡未帆・川戸歩美・山口直矢・川崎通夫・千田峰生. ユキホマレ低温裂開粒における種皮の組織化学的解析. 日本育種学会・日本作物学会 北海道談話会講演会 (2013).
- 北島拓也・義平大樹・小阪進一・山口直矢. 半無限および長花梗の性質を有した主茎型ダイズ系統における適正栽植密度の検討. 日本育種学会・日本作物学会 北海道談話会講演会 (2013).
- 山下陽子・船附秀行・山口直矢・鴻坂扶美子・大西志全. 高温年に発生する「トヨムスメ」特有の裂皮に関する QTL. 日本育種学会第 124 回講演会 (2013)
- 佐山貴司・高木恭子・小菅一真・岡野克紀・小松邦彦・笹間博子・山口直矢・鈴木千賀・加賀秋人・石本政男. 納豆用のダイズ品種は一莢内粒数を増やす遺伝子を持っている. 日本育種学会第 124 回講演会 (2013)
- 佐伯研一・遠藤貴司・品田博史・山本敏央. イネ高度耐冷性系統の第 4,6,9 染色体上に見いだされた穂ばらみ期耐冷性に関する QTL. 日本育種学会第 124 回講演会 (2013)
- 山口直矢・千田峰生・山下陽子・品田博史・石本政男・三好智明. ダイズの低温着色抵抗性マーカーを利用した低温裂開抵抗性系統の選抜. 日本育種学会第 125 回講演会 (2014)
- 千田峰生・平岡未帆・川戸歩美・川崎通夫・山口直矢. ダイズ低温裂開抵抗性品種由来の種皮着色突然変異体に見出された裂開粒率の大幅な上昇. 日本育種学会第 125 回講演会 (2014)

- 平岡未帆・川戸歩美・山口直矢・川崎通夫・千田峰生. ダイズ低温裂開抵抗性および感受性品種における種皮の組織化学的解析. 日本育種学会第 125 回講演会 (2014)
- 池ヶ谷智仁・品田博史・山本敏央・山本英司・堀清純・米丸淳一・松葉修一・藤野賢治. 北海道のイネ品種群の集団構造解析. 日本育種学会第 125 回講演会 (2014)
- 品田博史・藤野賢治・佐藤博一・山本敏央・山本英司・堀清純・米丸淳一・松葉修一・山本敏央. いもち圃場抵抗性遺伝子 Pi60 の同定. 日本育種学会第 125 回講演会 (2014)
- 北島拓也・義平大樹・小阪進一・山口直矢. 北海道中央部における半無限および長花梗の特性を有した主茎型ダイズ系統の適正栽植密度の検討. 日本作物学会第 237 回講演会 (2014).
- 笠島真也・伊藤博武・佐藤仁・堀内優貴・黒崎英樹・青山聡. アズキの早晩性には登熟日数が関与する. 日本作物学会第 236 回講演会 (2013).
- 東岱孝司・田澤暁子. ダイズシストセンチュウ抵抗性アズキ遺伝資源栽培による密度低減効果. 日本線虫学会第 21 回大会 (2013)
- 山本博規・堀内優貴・小倉玲奈・下田直美・佐藤仁・加藤清明. 開花期高度耐冷性アズキ遺伝資源 Acc3365 に由来する小粒遺伝子のマッピング. 日本育種学会・日本作物学会北海道談話会 (2013)

4) 研究部 生産システムグループ

- 梶山努. 畑作物の雑草対策に関する試験：平成 25 年度北海道有機農業技術交換発表会 (2014.3.5)
- 吉田邦彦. 馬鈴しょの植付株間変動による塊茎サイズ及び収量への影響：第 72 回 (平成 25 年度) 農業食料工学会年次大会 (2013.9.10)
- 山田洋文. 畑作経営における飼料用とうもろこし栽培受託の経済性と土地利用に与える影響に関する研究. 第 126 回北海道農業経済学会例会 (2013.9.14).
- 白井康裕・三宅俊輔・金子剛. 乳用牛の動態に関する推計法を組み込んだ牛乳生産費集計システム：日本農業経営学会報告要旨：166 - 167 (2013.9.22).
- 白井康裕. 現段階における畑作経営の構造から見た収益形成力：北海道農業経済学会個別報告 (2014.3.1).

5) 研究部 生産環境グループ

- 渡邊祐志・酒井治・田村元. 堆肥の混和方法・施用時期が畑作物の生育・収量に及ぼす影響 (予報). 2013

- 年度日本土壌肥料学会北海道支部秋季大会 (2013.12.4)
- 酒井治・谷藤健・田村元・渡邊祐志. 十勝地域の大豆栽培におけるリン酸減肥の可能性とアーバスキュラー菌根菌の感染. 2013 年度日本土壌肥料学会北海道支部秋季大会 (2013.12.4)
- 板垣英祐・笛木伸彦・渡邊祐志・武田尚隆・中住晴彦・日笠裕治. 大規模そば栽培のためのリビングマルチを活用した不耕起栽培技術の開発. 日本土壌肥料学会 2013 年度名古屋大会 (2013.9.13)

6) 研究部 地域技術グループ

- 岩崎暁生・佐藤安志・上杉龍士・萬屋 宏・久保田栄・池田二三高・徳丸 晋. 日本において農作物に寄生する *Tropicomyia* 属ハモグリバエ. 第 58 回日本応用動物学会大会. (2014.3.27)
- 橋本直樹・角野晶大・岩崎暁生・古館卓朗・西村 景・キム ワンギユウ・湯川淳一. 北海道におけるトマト・ミニトマトを加害するウロコタマバエ属の発生確認. 第 58 回日本応用動物学会大会. (2014.3.28)
- 湯川淳一・キム ワンギユウ・橋本直樹・角野晶大・岩崎暁生. 旧北区各地でほぼ同時に発見されたトマトを加害するウロコタマバエの一種. 第 58 回日本応用動物学会大会. (2014.3.28)
- 樋元淳一・遠藤千絵・西中未央・松永浩・奥村正敏・平井剛・小宮山誠一・齋藤優介・五十嵐伸一・植村弘之・津山睦生・浅見菜穂子・川村周三・木村俊範. ポテトチップ加工用バレイショの萌芽抑制貯蔵技術. 農業機械学会北海道支部大会. (2013.7.18)
- 中澤洋三, 田縁勝洋, 平井 剛, 佐藤広頭. 新品種やまのいも「きたねばり」の品質特性. 日本食品科学工学会北海道支部会. (2014.3.9)

(3) 資料及び専門雑誌

7) 研究部 豆類グループ

- 田中義則. 北海道の野菜づくり えだまめ. ニューカントリー：秋季臨時増刊号. p185-188 (2013)
- 田中義則. 評価の高い道産大豆を安定供給. ニューカントリー 11 月号. p13-15 (2013)
- 三好智明. 豆腐加工適性と耐冷性に優れるダイズ新品種「とよみづき」. JATAFF ジャーナル第 2 巻第 1 号. p.2-3 (2014)
- 三好智明. 「トヨハルカ」. 道総研農業試験場資料第 41 号「農作物優良品種の解説」(2005-2013)：20-22 (2014)
- 三好智明. 「ゆきびりか」. 道総研農業試験場資料第 41 号「農作物優良品種の解説」(2005-2013)：22-23 (2014)

- 三好智明. 「ユキホマレ R」. 道総研農業試験場資料第 41 号「農作物優良品種の解説」(2005-2013) : 24-25 (2014)
 - 三好智明. 「とよみづき」. 道総研農業試験場資料第 41 号「農作物優良品種の解説」(2005-2013) : 28-29 (2014)
 - 堀内優貴. 北海道中央部以南の気象条件に適した高品質、多収、病害抵抗性の小豆「きたあすか」. JATAFF ジャーナル第 1 巻第 12 号. p.44 (2013)
 - 堀内優貴. アズキの早生性はいかにして決まるか?. 豆類時報 71 号. p.12-18 (2013)
 - 田澤暁子. 土壌病害抵抗性を持つ小豆品種の育成について. 豆類時報 73 号. p.14-18 (2013)
 - 奥山昌隆. いんげんまめの品種改良における現状と目標. 豆類時報 74 号. p.6-11 (2014)
 - 堀内優貴. 「きたろまん」. 道総研農業試験場資料第 41 号「農作物優良品種の解説」(2005-2013) : 29-30 (2014)
 - 田澤暁子. 「ほまれ大納言」. 道総研農業試験場資料第 41 号「農作物優良品種の解説」(2005-2013) : 30-32 (2014)
 - 佐藤仁. 「きたあすか」. 道総研農業試験場資料第 41 号「農作物優良品種の解説」(2005-2013) : 32-33 (2014)
 - 奥山昌隆. 「福寿金時」. 道総研農業試験場資料第 41 号「農作物優良品種の解説」(2005-2013) : 33-34 (2014)
- 4) 研究部 生産システムグループ**
- 江部成彦. ジャガイモシストセンチュウの鎮圧に挑む抵抗性品種の活用と普及の課題. ニューカントリー 5 月号 : 15-17(2013)
 - 原 圭祐. 「明日の豆作り」(平成 26 年豆作り講習会テキスト. 適期収穫・機械収穫体系. 豆類基金協会. 133-146 (2014.1))
 - 白井康裕. 書評: 野中章久編著『国産ナタネの現状と展開方向ー生産・搾油から燃料利用までー』. 農業経営研究. 51(2) : 122 - 123 (2013)
 - 山田洋文. 耕畜連携で地域資源を生かす 企画 I システム構築の現状と課題. ニューカントリー 10 月号 : 10-13(2013)
- 5) 研究部 生産環境グループ**
- 渡邊祐志. 機械を使いこなし、水はけ改善 第 3 回 畑地の排水対策. ニューカントリー 7 月号 : 48-49 (2013)
 - 渡邊祐志. 農学校 1 年 1 組小麦の時間 第 7 回 圃場の準備と播種 (秋まき). ニューカントリー 8 月号 : 78-79 (2013)
 - 渡邊祐志. 機械を使いこなし、水はけ改善 第 8 回 排水改善のポイント⑤圃場の傾斜均平化. ニューカントリー 12 月号 : 82-83 (2013)
 - 渡邊祐志. 春の耕起作業のポイント～畑地の排水対策. ニューカントリー 3 月号 : 95-97 (2014)
 - 酒井治. 草地更新時の植生悪化要因と雑草対策. 農業共済新聞. 9 月 20 日 (2013)
 - 田村元. 技術特集 「高収量・高糖分のてん菜づくり」 施肥量の適正化. ニューカントリー 7 月号 : 20-22 (2013)
 - 田村元. リン酸肥料の減肥で生産コストの削減を! 移植てん菜のリン酸減肥指針. シュガービート No.93 : 8-9 (2013)
 - 田村元. 移植てん菜のリン酸減肥指針. てん菜協会だより 116 号 (2013)
 - 小澤徹. 前作とうもろこしが小麦のデオキシニバレノール (DON) 汚染におよぼす影響. あぐりぼーと, ホクレン農業協同組合連合会, 札幌市. 103 : 11 (2013).
 - 小澤徹. 前作とうもろこしがデオキシニバレノール (DON) 汚染に及ぼす影響. 農業共済新聞 8 月 7 日 (2013)
 - 小澤徹. コムギ赤かび病・前作とうもろこしが DON 汚染に及ぼす影響. ニューカントリー 11 月号 : 36-37 (2013)
 - 池田幸子. 秋まき小麦の赤さび病に対する薬剤防除法ー本年の「きたほなみ」での多発からー. 農家の友 11 月号 : 38-40 (2013)
 - 池田幸子. 北海道の秋まき小麦に発生しやすい病害虫に対する防除ポイント. 日本農業新聞. 10 月 29 日 (2013)
- 6) 研究部 地域技術グループ**
- 松永浩. エチレンで萌芽を抑制する高品質貯蔵技術 ニューカントリー 2013 年 5 月号 : 60-61 (2013)
 - 松永浩. エチレンを用いた加工用馬鈴しょの貯蔵技術 農家の友 2013 年 8 月号 : 36-38 (2013)
 - 田中静幸、平井剛、地子立. 上川北部地域におけるセル成型苗を利用したカボチャの安定生産技術. 北農. 80 (4) : 381-386. (2013)
 - 田縁勝洋、平井剛. ながいも新品種「十勝 4 号」の育成とやまのいも類の品種開発. 北農. 80(4) : 377-380. (2013)
 - 平井剛. 「十勝 4 号」. 道総研農業試験場資料第 41 号「農作物優良品種の解説」(2005-2013) : 78 (2014)
 - 平井剛. 「きたねばり」. 道総研農業試験場資料第 41

- 号「農作物優良品種の解説」(2005-2013) : 79 (2014)
- 平井剛. 地域が誇る農の逸品 2014「良く太り、よくとれる! ナガイモ新品種「十勝4号」」農林水産技術研究ジャーナル H26,1月号 : 18-19 (2013)
- 平井剛. 北海道の野菜づくり「被覆資材の種類と特性」ニューカントリー 2013 年秋季増刊号 : 36-45 (2013)
- 平井剛. 北海道の野菜づくり「にんじん」ニューカントリー 2013 年秋季増刊号 : 253-256 (2013)
- 田縁勝洋. 北海道の野菜づくり「ながいも」ニューカントリー 2013 年秋季増刊号 : 266-271 (2013)
- 岩崎暁生. 土壌凍結深の制御による野良イモ対策技術. ニューカントリー. 715 : 54-56 (2013).
- 岩崎暁生. 野良イモ退治とウェブシステムの活用. 農家の友. 66(1) : 84-87. (2014).
- 松永浩. エチレンを用いたポテトチップス用馬鈴しょの貯蔵技術. 農業共済新聞 (2013.9.11)
- 岩崎暁生. 土壌凍結深予測モデルで効率的な除雪スケジュールを決定 畑の除雪で野良イモ退治. 農業共済新聞 (2013.9.18)

(4) 刊行物印刷

資 料 名	部 科 名	発行年月	頁数	部数
平成 24 年度(地独)道総研十勝農業試験場年報	(全場資料)	H25.9	47	HP掲載のみ
平成 25 年度十勝圏農業新技術セミナー資料	(全場資料)	H26.2	32	600部、HP掲載

F 研修及び技術指導

1. 研修生の受入れ

(1) 普及指導員研修

専門技術研修（畑作）及び新任者早期養成	火ノ川祐貴 普及職員（空知本所） 石川弘大 普及職員（十勝本所） 佐々木えり子 普及職員（十勝東部支所） 坂井由香里 普及職員（十勝北部支所）	H25.6.25 ～ 6.28	豆類G 生産環境G 生産システムG 地域技術G 技術普及室
普及指導員高度専門技術研修（畑作）	草野裕子 専門普及指導員（網走本所） 吉岡千夜 専門普及指導員（清里支所）	H25.9.3 ～ 9.6	豆類G 生産環境G 生産システムG 地域技術G 技術普及室

(2) J I C A 研修

研 修 コ ー ス	研修内容・研修生（人数）	実施日	担当グループ
JICA（国別研修）「イラク農法改善」コース	十勝農業試験場の概要、北海道の普及事業－農業試験場との連携 JICA 研修生 10 名	H25.6.14	研究部長、技術普及室
持続的農業生産と環境保全のための土壌診断技術	北海道における土壌診断・環境保全技術 JICA 研修生 9 名	H25. 6. 27 -28	生産環境G
JICA（集団研修）「農業生産システム強化のための種苗の品質管理制度」コース	十勝農業試験場の概要、北海道の種苗生産システム、豆類の品種及び栽培技術開発 JICA 研修生 9 名	H25. 7. 31	研究部長、豆類G
JICA 青年研修「アフガニスタン農村振興」コース	十勝農業試験場の概要、農業試験場と農業改良普及センターの連携 JICA 研修生 19 名	H25. 10. 2	研究部長
JICA（地域別研修）「アフリカ地域小規模農民のための複合農業」コース	十勝農業試験場の概要、北海道の普及事業－農業試験場との連携 JICA 研修生 13 名	H25. 11. 7	研究部長 技術普及室
持続的土地管理技術と土壌診断	北海道における土壌診断・環境保全技術 JICA 研修生 4 名	H25. 11. 26	生産環境G

(3) その他

研 修 内 容	対 象 者 等	実施日	担当グループ
J A 芽室町新農業経営者育成システム研修	J A 芽室町新農業経営者育成システム 新規就農者 5名	H25. 7. 8, 9, 12	地域技術G他
J A 芽室町新農業経営者育成システム研修	J A 芽室町新農業経営者育成システム 新規就農者 5名	H25. 11. 8, 11	地域技術G他
JA ネットワーク十勝農技協研修会	農協職員（営農指導員主体）	H25. 5. 14	地域技術G 技術普及室
鹿追高校職場体験研修	鹿追高校 1名	H 25.7.3 ~ 7.5	研究部長、各G
芽室中学校職場体験学習	芽室中学校 1名	H25.10.18	研究部長、豆類G、 生産環境G

2. 技術指導

指導・研修内容	対 象 者 等 (場所)	実施日	担当グループ
平成 26 年豆作り講習会	生産者・農業関係者(幕別町)	H26. 1. 29	豆類G
大豆講習会	生産者（本別町）	H26. 3. 26	豆類G
道産農畜産物の生産コスト削減に向けた検討に係る打合せー品目ごとのコスト削減をめぐる現状・課題についてー	北海道農政部職員 30 名、札幌市	H25.8.9	生産システムG
平成 2 5 年度普及指導員新任者早期養成研修（集合研修・新任者研修 I）ー畑作物の生産動向ー	普及指導員 17 名、新得町	H25.9.27	生産システムG
営農担当指導職員スキルアップ研修ー組勘分析ツールの活用についてー	農協職員 25 名、音更町	H25.10.11	生産システムG
イアコーン生産・利用による耕畜連携の経済性評価と普及・定着に当たっての課題	農業者、行政・普及・研究関係者 約 200 名	H25.11.22	生産システムG
平成 2 5 年度営農指導員研修（畜種）ー酪農経営の実態と収益性ー	農協職員 8 名、帯広市	H25.11.28	生産システムG

2. 技術指導（続き）

指導・研修内容	対象者等（場所）	実施日	担当グループ
全十勝地区農民連盟実務担当者意見交換会 －所得データからみた畑作経営・酪農経営 の課題について－	十勝管内農民団体役員 41 名、幕別町	H25.12.11	生産システムG
JA 十勝清水町職員研修－所得データから みた畑作経営・酪農経営の課題について－	農協職員 30 名、帯広市	H26.1.16	生産システムG
畑作物の輪作に関する研修会－輪作体系維 持に向けた今後の課題～畑作経営の所得デ ータの解析を通して～	十勝総合振興局職員・市町村役場職員 ・普及指導員・農協職員・北農研セ・ 道総研 66 名、帯広市	H26.2.3	生産システムG
平成 25 年度普及指導員普及奨励新技術研 修（畜産部門）	普及指導員 50 名、新得町	H26.2.12	生産システムG
JA 浦幌町農協青年部学習会－決算書ら みた畑作経営・酪農経営の課題について－	農業者 15 名、浦幌町	H26.2.19	生産システムG
西十勝放牧研究会－決算書らみた酪農経営 の課題と組勘分析ツールを活用した経営診 断について－	農業者 10 名、芽室町	H26.3.27	生産システムG
畑地の透排水性改善について	糖業会社・農家	H25. 4. 12	生産環境G
土壌の 3 相分布の測定について	十勝農業改良普及センター	H25. 4. 17	生産環境G
土壌の 3 相分布の測定について	十勝農業改良普及センター	H25. 4. 22	生産環境G
土壌の α グルコシダーゼ活性の測定につ いて	十勝農業改良普及センター	H25. 4. 22	生産環境G
土壌の 3 相分布の測定について	十勝農業改良普及センター	H25. 4. 24	生産環境G
土壌の 3 相分布の測定について	十勝農業改良普及センター	H25. 4. 25	生産環境G
バイオエタノール発酵残さ散布による牧草 の障害対応	地域農研	H25. 5. 21	生産環境G
土壌の 3 相分布の測定について	十勝農業改良普及センター	H25. 5. 24	生産環境G
土壌の 3 相分布の測定について	十勝農業改良普及センター	H25. 5. 28	生産環境G
小麦生育異常圃場の土壌分析	JA 芽室	H25. 6. 24	生産環境G
土壌の 3 相分布の測定について	十勝農業改良普及センター	H25. 7. 20	生産環境G
土壌の 3 相分布の測定について	十勝農業改良普及センター	H25. 8. 2	生産環境G
土壌の α グルコシダーゼ活性の測定につ いて	十勝農業改良普及センター	H25. 8. 2	生産環境G

2. 技術指導（続き）

指導・研修内容	対象者等（場所）	実施日	担当グループ
土壌の3相分布の測定について	十勝農業改良普及センター	H25. 8. 5	生産環境G
土壌物理性と作物生育について	十勝農業改良普及センター	H25. 8. 7	生産環境G
ばれいしょ生育異常圃場の土壌分析	JA 芽室	H25. 8. 8	生産環境G
地球温暖化の農作物への影響予測と対応	豆類需給安定会議	H25. 9. 5	生産環境G
土壌の3相分布の測定について	十勝農業改良普及センター東部支所	H25. 10. 1	生産環境G
土壌の3相分布の測定について	十勝農業改良普及センター東部支所	H25. 10. 8	生産環境G
土壌の3相分布の測定について	十勝農業改良普及センター東部支所	H25. 10. 15	生産環境G
農業生産における環境問題と対応策	農大研究課程1学年、農大	H25. 10. 29	生産環境G
ほ場の傾斜均平化における留意点	十勝農業改良普及センター東部支所、農家	H25. 11. 13	生産環境G
土壌透水性改善のポイント	十勝農業改良普及センター東部支所、農家	H25. 11. 13	生産環境G
秋まき小麦に対する適正追肥に係る現地指導	北海道肥料	H25. 11. 14	生産環境G
バーク堆肥の利活用について	帯広市農業技術センター	H25. 11. 28	生産環境G
JA が実施した土壌肥料関連試験に係る助言	JA 芽室	H25. 12. 16	生産環境G
圃場の排水対策について	農家、JA 職員・行政実務担当者 150 名、池田町	H25. 2. 6	生産環境G
銀河線ブロック農協青年部冬季研修会	JA職員・農家48名、本別町	H25. 2. 6	生産環境G
農協青年部勉強会	JA職員・農家70名、音更町	H25. 2. 14	生産環境G
肥料講習会	全道肥料卸商・小売店の会社社員 170 名、札幌市	H25. 2. 21	生産環境G
畑作における堆肥施用法について	JA職員・農家30名、足寄町	H25. 3. 20	生産環境G
秋まき小麦の雪腐病の調査方法について	JA芽室職員8名（芽室町）	H25. 4. 5	生産環境G
秋まき小麦の縞萎縮病の発生状況について	十勝農業改良普及センター、JA芽室職員10名（芽室町）	H25. 5. 8	生産環境G
秋まき小麦の縞萎縮病について	十勝農業改良普及センター職員5名（更別村）	H25. 5. 16	生産環境G
秋まき小麦の黄化症状について	JA芽室職員1名（芽室町）	H25. 5. 21	生産環境G
飼料用とうもろこしの根腐病の調査方法について	十勝農協連職員4名（帯広市）	H25. 5. 29	生産環境G

2. 技術指導（続き）

指導・研修内容	対象者等（場所）	実施日	担当グループ
種馬鈴しょ生産基礎研修会アドバイザー	種生産者、十勝農協連職員約40名（帯広市）	H25. 6. 18	生産環境G
秋まき小麦の縞萎縮病について	生産者・農協職員30名（帯広市）	H25. 7. 3	生産環境G
飼料用とうもろこしの根腐病の診断方法について	十勝農業改良普及センター職員20名（新得町）	H25. 7. 4	生産環境G
飼料用とうもろこしの根腐病の調査方法について	十勝農協連職員6名（帯広市）	H25. 7. 5	生産環境G
病害虫診断研修	普及センター十勝東部支所職員5名（池田町）	H25. 7. 8	生産環境G
インゲンマメゾウムシの発生生態について	JA池田町、JA幕別町ほか	H25. 7. 25	生産環境G
ばれいしょ病害の調査方法について	普及センター十勝北部・東北部支所職員2名（音更町、足寄町）	H25. 8. 1	生産環境G
飼料用とうもろこしの根腐病の診断方法について	十勝農業改良普及センター職員20名（中札内村）	H25. 9. 18	生産環境G
種馬鈴しょ生産基礎研修会アドバイザー	種いも生産者、十勝農協連職員約40名（帯広市）	H25. 11. 25	生産環境G
普及指導員地域課題解決研修対応	十勝農業改良普及センター職員15名（帯広市）	H25. 12. 2	生産環境G
施防協試験にかかる技術指導	JA、ホクレン職員ほか約100名（音更町）	H26. 1. 9	生産環境G
ジャガイモ病害の種類・特徴についての技術指導	カルビーポテト職員約40名（芽室町）	H26. 1. 29	生産環境G
ながいも土壌病害の総合的な防除対策について	生産者、JA職員ほか40名（帯広市）	H26. 2. 27	生産環境G
小麦立毛調査	農業団体職員・生産者、芽室町	H25. 4. 17	地域技術G
小麦幼穂形成期の可変施肥デモンストレーション	普及職員・農家6名、本別町	H25. 5. 7, 9	地域技術G、生産システムG
地域課題解決研修「十勝における飼料用とうもろこしの病害発生要因の傾向と対策」	普及職員、帯広市	H25. 5. 16	地域技術G
園芸担当者会議	普及職員、池田町	H25. 5. 17	地域技術G
小麦止葉期の可変施肥デモンストレーション	普及職員・農家11名、本別町	H25. 6. 4, 5	地域技術G、生産システムG
赤さび病多発について	生産者、更別村	H25. 6. 26	地域技術G
てん菜生育期の生育センサーによるセンシング指導	普及職員・農家1名、池田町	H25. 6. 28	地域技術G、生産システムG
地域課題解決研修「十勝における飼料用とうもろこしの病害発生要因の傾向と対策」	普及職員、新得町	H25. 7. 4	地域技術G、生産環境G
ヤングファーマーズ講座研修会	普及職員・農家15名、池田町	H25. 7. 12	場長、地域技術G
葉枯れ症状について	生産者・普及職員・農協職員、清水町	H25. 7. 12	地域技術G

2. 技術指導（続き）

指導・研修内容	対象者等（場所）	実施日	担当グループ
ホクレン清水製糖工場農業技術連絡協議会中間検討会	普及職員・関係者、新得町、清水町、鹿追町、土幌町、上土幌町	H25. 7. 17	地域技術G、生産システムG
地域課題解決研修「十勝における飼料用とうもろこしの病害発生要因の傾向と対策」	普及職員、中札内村	H25. 8. 30	地域技術G、生産環境G
やまごぼうの収穫状況について	JA職員・普及職員、中札内村	H25. 11. 8	地域技術G
やまのいも基本系統、原原種の増殖について	JA職員・普及職員、帯広市	H25. 11. 14	地域技術G
地域課題解決研修「十勝における飼料用とうもろこしの病害発生要因の傾向と対策」	普及職員、帯広市	H25. 12. 2	地域技術G
青果物生産・流通研修会	農協・生産者・普及センター	H25. 12. 4	地域技術G
JA中標津ダイコン部会野菜栽培講習会	普及職員・JA職員・農家、中標津町	H25. 12. 20	地域技術G 地域技術G
ながいも講習会	生産者・JA職員、音更町	H26. 2. 13	地域技術G
ながいも講習会	生産者・JA職員、池田町	H26. 2. 21	地域技術G
ホクレン清水製糖工場農業技術連絡協議会平成25年度試験成績検討会及び平成26年度課題検討会	普及職員・関係者、新得町、清水町、鹿追町、土幌町、上土幌町	H26. 2. 27	地域技術G、生産システムG、生産G

計 82 件

このほかに、病虫害診断対応（生産環境G）合計 156 件

一般講演、その他技術指導

- 梶山 努. 地球温暖化が十勝主要作物に与える影響と対応方向. 第 38 回 J A 十勝青年部大会(帯広市).(2013.11.21)
- 原 圭祐. N センサによる小麦の変態追肥システムと今後の展開. 圃場情報に基づく可変施肥効果に関する実演検討会(帯広市). (2013.11.29)
- 原 圭祐. 生育センサを活用した可変施肥システムと効果. 清里地区指導農業士・農業士会冬季研修会(斜里町). (2014.1.28)
- 原 圭祐. 農業機械の電子化と通信制御共通化が作物生産にもたらすもの. 新たな農林水産政策を推進する実用技術開発事業実用技術開発事業報告会(札幌市). (2014.1.30)
- 原 圭祐. 生育センサによる小麦の変態追肥システムと今後の研究開発. 本別町次世代農業に係わる研修会(本別町). (2014.2.14)
- 白井康裕. 平成 25 年度宗谷地域農業新技術発表会(豊富町). (2014.3.5)
- 山田洋文. 耕畜連携によるイアコーン栽培および利用技術について. 清里地区指導農業士・農業士会冬季研修会(斜里町). (2014.1.28)

3. 参観・視察者対応

(1) 主な参観・視察者

訪問団体等	人数	担当グループ	訪問日
帯広地区麦生産組合	12名	生産環境G	H25. 4. 9
(株) 山本忠信商店	45名	地域技術G	H25. 4. 17
芽室町農村青年連絡協議会河北支部	17名	生産環境G	H25. 6. 3

(1) 主な参観・視察者（続き）

訪 問 団 体 等	人 数	担当グループ	訪問日
食と水とエネルギーの未来を考える会（東京都）	12名	場長・部長	H25. 6. 6
ホクレン肥料（株）空知工場	5名	生産環境G	H25. 6. 17
生産から食品までを考える会（兵庫県）	3名	生産環境G	H25. 6. 20
J A つべつ青年部	20名	豆類G	H25. 6. 26
音更町高齢者大学	7名	生産システムG	H25. 6. 27
帯広畜産大学環境農学ユニット	35名	豆類G	H25. 7. 2
美幌町種子生産組合	10名	地域技術G	H25. 7. 2
十勝地域農業技術支援会議移植てんさい施肥リン酸半減プロジェクト	35名	生産環境G	H25. 7. 2
北海道糖業（株）	6名	生産環境G	H25. 7. 3
J A 帯広大正青年部	25名	豆類G	H25. 7. 4
津別町農業法人会	15名	生産システムG	H25. 7. 4
浦幌町相川農事組合	20名	地域技術G	H25. 7. 5
J A 音更町長芋部会	22名	地域技術G	H25. 7. 5
後志農業改良普及センター	5名	生産環境G	H25. 7. 9
清里町長いも生産組合	10名	地域技術G	H25. 7. 10
ホクレン（中斜里・清水製糖工場、女満別種子工場他）	8名	生産環境G	H25. 7. 12
新得町畑作振興会	15名	地域技術G	H25. 7. 12
津別町第6営農組合、津別町、J A つべつ他	12名	生産環境G	H25. 7. 16
清里地区指導農業士・農業士会	18名	豆類G	H25. 7. 17
J A 札内	10名	豆類G	H25. 7. 22
芽室町農村青年連絡協議会河北支部	8名	生産環境G	H25. 7. 23
J A 古川（宮城県）	24名	豆類G	H25. 7. 24
帯広地区麦生産組合	7名	生産環境G	H25. 7. 29
和寒町農業委員会	14名	生産環境G	H25. 7. 30
白糠町校長会	7名	生産環境G	H25. 8. 1
J A とうや（壮瞥町こだわり米を作ろう会）	5名	場長	H25. 8. 5
とち花き研究会	12名	地域技術G	H25. 8. 20

(1) 主な参観・視察者（続き）

訪 問 団 体 等	人 数	担当グループ	訪問日
J A帯広かわにし青年部	28名	生産環境G	H25. 8. 22
大樹町畑作研究会	10名	豆類G	H25. 8. 23
J Aネットワーク十勝農産技術対策協議会	30名	豆類G	H25. 8. 26
ホクレン帯広支所	35名	豆類G	H25. 8. 27
(株) 丸勝・兵庫県製館組合	6名	豆類G	H25. 8. 30
ながいも若手育成塾（青森県）	30名	地域技術G	H25. 9. 3
北海道立農業大学校	19名	地域技術G	H25. 9. 4
(公財)北海道豆類価格安定基金	30名	豆類G	H25. 9. 5
杉原産業（株）他	6名	豆類G	H25. 9. 11
十勝農業改良普及センター	15名	地域技術G	H25. 9. 20
お菓子の香梅、東海澱粉（株）、ホクレン	5名	豆類G	H25. 9. 26
江原道農業技術員（韓国）	8名	部長	H25. 9. 26
雪印種苗（株）富士営業所	3名	豆類G	H25. 9. 27
十勝インターナショナル協会	23名	部長	H25. 10. 2
山崎製パン（株）、ホクレン	6名	豆類G	H25. 10. 3
士幌高等学校アグリビジネス科	21名	生産環境G	H25. 10. 18
中国黒竜江省ハルビン市東北農業大学	8名	部長	H25. 10. 29
十勝西部農業推進協議会、農業改良普及指導員	20名	生産環境G	H25. 10. 31
帯広畜産大学地域環境学研究部門、韓国国立食糧科学院畑作科	3名	豆類G	H25. 10. 31
南江別揚水組合	7名	生産環境G	H25. 11. 6
J A北みらい	8名	生産環境G	H25. 11. 28
国立大学法人東京大学社会科学研究所	5名	豆類G	H25. 12. 6
大樹町ゆとり農業推進会議土づくり部会	10名	豆類G	H25. 12. 10
J A鹿追町 豆類種子生産組合	30名	豆類G	H26. 1. 30

(2) 参観者・視察者総数

4月：2団体57名、6月：6団体64名、7月：19団体299名、8月：8団体133名、9月：8団体116名、
10月：6団体81名、11月：2団体15名、12月：2団体15名、1月：1団体30名、計54団体：810名

G 広報活動、研究企画・場運営等

1. 広報活動

(1) 十勝農試公開デー

日時：平成25年8月8日10:00～13:00

場所：場内

主催：十勝農試

後援：十勝総合振興局、芽室町、芽室町農業協同組合

協力：帯広市、十勝農業協同組合連合会、十勝農業改良普及センター

参加者：295名（生産者13、団体職員等58、一般大人128、高校生以下96）

催事内容：①農試技術パネル展、②十勝今昔作物ガーデン、③地面の下を覗いてみよう、④ほ場見学ツアー、⑤ミクロの世界を覗いてみよう、⑥マリーゴールドの鉢上げ体験、⑦作ってみよう豆アート、⑧トラクターに乗ってみよう、⑨あなたは何馬力？、⑩スタンプラリー、⑪試食コーナー（農試産大豆使用「きなこ棒」・農試産手亡と道産はるきらりの特選「白あんパン」・ふかしいも・十勝産あずき「手詰めもなか」・どん菓子・わたあめ）、⑫販売コーナー（はちみつ・なたね油・パン）

(2) 平成25年度十勝圏農業新技術セミナー

日時：平成26年2月25日10:00～15:00

場所：鹿追町民ホール

主催：十勝農試

共催：鹿追町、十勝農業改良普及センター

後援：鹿追町農業協同組合、十勝農業協同組合連合会、十勝総合振興局

出席者：289名

講演発表：

・新品種の紹介：①でん粉用ばれいしょ「北育20号」、②でん菜「HT34」・「KWS1K234」、③加工用たまねぎ「カロエワン（北交1号）」

・新技術などの紹介：④小麦の雪腐病を上手に防ぐには一効き目の長い殺菌剤を利用して、⑤過去のデータから「きたほなみ」の最適施肥量がわかる！、⑥「ゆめちから」の品質変動とブレンド粉の加工適性、⑦青色申告決算書を使って所得解析ができる！、⑧大豆のリン酸施肥を3割減らせる前作条件、⑨小豆の農薬成分使用回数半減モデル、⑩ばれいしょの規格内率向上にはやっぱり茎数確保が大事、⑪ばれいしょの特別栽培を可能にする疫病防除法、⑫エチレングスを用いた生食用ばれいしょの長期貯蔵技術

・情報：今年注意すべき病害虫

・農業改良普及センターにおける普及活動事例の紹介：清水町における普通型コンバインによる大豆収穫の取り組み

・要旨集：計14課題の概要を記載し、出席者に配布。

・パネル展示：計21枚のパネルをロビーに掲示。

・試食：十勝産やまのいもを生地に加えた「やまのいもパン」を試食コーナーで出席者に提供。

(3) 帯広市食産業振興協議会

生産から消費までの食に係わる幅広い関係者が連携し、帯広・十勝で生産される農産物を活用し、付加価値の高い製品等を創出することを目的とした同協議会に委員を1名おくとともに、随時参画、出席した。

・平成25年5月20日：帯広市役所で行われた総会に出席、1名。

・平成26年3月25日：北海道ホテルで開催の「輝きを秘めた十勝産食材に会う試食会」に5名が出席し、各食材の特性を説明した。

(4) 2013アグリビジネス創出フェア in Hokkaido

日時：平成25年11月28～29日10:00～17:00（16:00）

場所：サッポロファクトリー（札幌市）

主催：(NPO)グリーンテクノバンク

後援：北海道、ほか

参加者：札幌市民など2,500人

出展内容：農業・食品分野の技術展示交流会の農業研究本部の展示ブースにおいて、大納言小豆「ほまれ大納言」を用いた熊本県の銘菓「誉れの陣太鼓」の試食と品種のPRを行った。

(5) スクラム十勝シンポジウム2013

日時：平成25年11月9日 13:30～17:00

場所：とちプラザ2階視聴覚室（帯広市）

主催：スクラム十勝（帯広畜産大学、北農研芽室拠点、とち財団、家畜改良センター十勝牧場、畜産試験場、十勝農試）

出席者：約140人

内容：「競争力のある十勝農業を目指して」を全体テーマとして、①さらなる自給飼料の活用、②生産物の価値を高める取り組みについて、各構成機関から講演した。

なお、スクラム十勝戦略計画チーム会議は平成25年8月5日に帯広畜産大学で開催され、十勝農試から2名が出席した。

(6) ホームページの更新、技術情報の掲載

主催行事開催案内および入札情報を随時掲載した。また、耕作期間は、定期作況報告と病害虫発生予察情報を毎月更新した。十勝農試公開データの開催結果、十勝農業新技術セミナーの開催結果と要旨集を掲載した。

(1) 諸会議

ア 運営会議

場の管理運営に係る事項の協議を行う場として、協議案件により、運営会議（研究主幹以上）ないしは拡大運営会議（主査以上）を開催した。また、必要に応じ、各研究主幹と総務課（主査以上）の打合せ会議を開催し、場内の運営について協議した。

イ 北海道農業試験会議の研究課題検討会議、成績会議及び設計会議に提出する試験研究課題について、7月、12月及び2月に場内検討会を行った。

ウ 現地委託試験に係る成績検討会を平成25年12月3日に芽室町「めむろ一ど」で、次年度設計検討会を平成26年3月19日に当场において開催した。

2. 研究企画・場運営等

(2) 各種委員会

1) 構成

委員会名	委員長	副委員長	事務局	委員
安全衛生対策検討会	—	—	安全衛生事務責任者(総務課長)	総務課：衛生推進者（主査(調整)）、安全衛生担当者（工藤指導主任） 研究部：研究部長、各研究主幹 労組：支部長、書記長
交通安全対策委員会	安全運転管理者(総務課長)	研究部長、副安全運転管理者（豆類G研究主幹）	主査(総務)	各研究主幹（豆類Gを除く）
土地利用計画委員会	研究部長	総務課長	生産環境G研究主幹	各研究主幹、研究部各主査（経営・地域支援を除く）
契約職員雇用委員会	総務課長	—	主査(総務)	各研究主幹
業務委員会	研究部長	—	豆類G研究主幹	仲鉢正志、山口直矢、堀内優貴、加藤弘樹、田村元、池田幸子、平井剛
情報システム委員会	研究部長	—	生産システムG研究主幹	奥山昌隆、加藤弘樹、小澤徹、田縁勝洋、主査（調整）
図書委員会	研究部長	総務課長	地域技術G研究主幹	品田博史、吉田邦彦、須田達也、松永浩、主査（総務）

2) 活動内容

①土地利用計画委員会

本年度の土地利用委員会は、7月11日、9月4日、1月17日、3月25日に計4回開催した。

輪作ほ場の作付計画を協議し、平成26年度の作付予定

を決定した。また、ダイズシストセンチュウが発生した輪作圃場内の「土壌病害虫高密度ほ場」について、発生密度が低減したことから、第2回土地利用委員会の協議を経て指定を解除した。なお、ダイズシストセンチュウ対策としての緑肥作物の選定・栽培法等については、継

続して検討する。

継続検討事項となっていた「十勝農試土壌病害虫汚染防止方針」について、第1回土地利用委員会の協議を経て改訂した。これについては周知による徹底が重要であることから、職員及び契約職員に対して、年度当初及び採用辞令交付時に伝える事とした。

農試場内の防風林の整備計画について年間を通じて協議を進め、平成27から36年度にかけての「防風林整備計画」を作成した。概要は、①継続的な整備、②防風林の列間隔の拡大、③優先順位の設定、④樹種はカラマツとする、等であり、次年度、整備予算の要求を行う。

②契約職員雇用委員会

平成26年1月10日の次年度雇用計画検討会議、2月3日から17日までの求人揭示（ハローワーク）と書類選考後を経て、2月18日から2月28日までに面接試験及び一部実技試験を実施。2月28日に平成26年度の場内契約職員40名（事務補助、農作業補助、農業技能）の任用者を決定した。

③業務委員会

平成25年4月10日から11月7日まで、毎週木曜日15時30分から定期業務委員会を延べ28回開催した。木曜日午

前までに、各科から希望する翌週の農作業、臨時農技の配属、業務車配車等をイントラネット上のエクセルワークシートに入力し、委員会で調整・決定した。なお、支援チーム付の契約職員の雇用期間は、農業技能が4月1日から11月30日まで3名、農作業補助（室外）が4月22日から12月12日まで4名、5月1日から12月20日まで9名、9月1日から12月27日まで5名、事務補助（室内）4月1日から～3/31まで1名であった。

④情報システム委員会

年間を通じて、十勝農試ホームページの運用管理及び、場内LANの保守および液晶プロジェクターなどの機材管理を行った。また、無停電電源装置とバックアップ用ハードディスクを導入した。

⑤図書委員会

平成25年6月5日（第1回）と11月26日（第2回）に委員会を開催し、第1回では、年間業務の確認、図書購入に係る作業、図書受け入れ・製本作業、文献検索などについて協議した。第2回では、定期購読雑誌の費用負担の確認、資料余部の保管ルール、図書管理用PCの更新、古い図書の扱いなどについて協議した。

(3) 職員研修

1) 職員研修

受講者	研 修 課 題	研 修 場 所	研 修 期 間
小林 英範	法人会計研修	道総研食品加工研究センター	H25. 4. 12
高宮 泰宏	研究進行管理能力向上研修	北海道大学創成研究機構	H25. 5. 31
江部 成彦	新任研究主幹級研修	道総研工業試験場 北海道大学創成研究機構	H25. 6. 19～21
池田 幸子	新任研究主幹級研修	北海道大学創成研究機構	H25. 7. 29～30
中川 浩輔 加藤 弘樹	平成25年度農業研究本部新入職員研修	道総研中央農業試験場	H25. 10. 29～10. 30
高宮 泰宏	植物遺伝資源の導入に係る専門研修	道総研工業試験場	H25. 12. 20
加藤 弘樹	広報研修	北海道大学創成研究機構	H26. 1. 27

2) 技術研修

受講者	研 修 課 題	研 修 場 所	研 修 期 間
小林 聡	農林水産関係若手研究者研修	農林水産技術会議事務局 筑波事務所	H25. 11. 27～11. 29

(4) 海外出張 なし

(5) 表彰

受 賞 者	表 彰 項 目	受 賞 日
後藤 英次 五十嵐俊成 古原 洋 渡邊 祐志 安積 大治 柳原 哲司 長田 亨 丹野 久	日本作物学会技術賞（北海道における水稲良食味品種の栽培技術の開発と普及）	H26. 3. 29

(6) 職場研修

研 修 項 目	実 施 期 間
農作業安全等研修会（契約職員雇用時）	4/1・11・22、5/1、7/11、9/1、9/17
場内圃場参観リハーサル	6月12日13:10～16:20
各種学会、研究会、談話会等の講演リハーサル	随時実施

3. 自己点検への対応表

連番	項目番号	自己点検事項	件数・人数等
4	1	各機関へ直接寄せられたニーズ把握件数	0
8	1	H25ニーズ把握によるH26新規課題となった件数	0
12	2	「H26研究展開方向」に定める研究課題数	1
16	6	重点研究課題数	2
28	7	経常研究課題数	20
36	8	道受託研究課題数	4
44	9	公募型研究への応募課題数	16
51	9	公募型研究課題数	23
67	10	一般共同研究課題数	1
79	11	受託研究課題数	22
95	15	研究成果発表会・企業等向けセミナーの開催件数	1
99	15	研究成果発表会・企業等向けセミナーへの延べ参加者数	289
103	15	研究会等の開催件数	1
107	15	研究会等への延べ参加者数	16
111	15	発表会・展示会等への出展件数	1
115	16	研究報告書の発行種類数	2
119	16	技術資料の発行種類数	0
126	17	学会やシンポジウム等での発表件数	41
130	17	学術誌や専門誌への投稿論文数	11
134	18	普及組織との連絡会議等開催件数	7
138	20	技術相談件数	227
146	21	技術指導件数	239
154	22	技術審査件数	0
166	25	依頼試験実施件数	2
170	26	試験機器等の設備の貸与件数	0
194	32	利用者意見把握調査の回答数	2
203	33	研修会・講習会等の開催件数	13
207	33	研修会・講習会等の延べ参加者数	727
211	34	研修者の延べ受入人数	173
223	35	出願中特許等件数	1
231	35	特許権等保有件数	1
243	35	出願品数	3
251	35	登録品数	18
263	37	登録品数等の利用許諾件数	96
267	39	視察者・見学者の受入件数	53
271	39	視察者・見学者の延べ受入人数	775
275	39	道民向けセミナーの開催件数	1
279	39	道民向けセミナーの延べ参加者数	40
283	39	公開デー等の開催件数	1
287	39	公開デー等の延べ参加者数	295
291	39	学会等役員・委員等件数	7
295	39	国際協力事業等への協力件数	6
299	41	災害等に関係した道受託研究等件数	0
303	41	災害等に関係した技術指導件数	0
307	41	災害等に関係した委員派遣件数	0
311	42	連携協定等の締結件数 ※通算	1
329	43	連携基盤を活用し実施した研究の件数	5
337	43	連携基盤を活用し実施した技術支援の件数	0
353	44	道関係部との連絡会議等の開催件数	9
371	45	市町村との意見交換等の開催件数	4
389	46	外部機関等との人材交流件数（派遣件数）	0
393	46	外部機関等との人材交流件数（派遣人数）	0
397	46	外部機関等との人材交流件数（受入件数）	0
401	46	外部機関等との人材交流件数（受入人数）	0
405	47	海外研修の派遣件数	0
409	47	海外研修の派遣人数	0
413	47	国内研修Ⅰの派遣件数	0
417	47	国内研修Ⅰの派遣人数	0
421	47	国内研修Ⅱの派遣件数	8
425	47	国内研修Ⅱの派遣人数	8
429	49	ホームページの改修件数	2
433	50	ホームページ更新件数	21
437	50	企業等への訪問件数	3
441	50	メールマガジン発行数	0
445	50	メールマガジン登録者数 ※通算	0
456	56	道民意見把握調査の回答数	157
468	56	関係団体等との意見交換等の開催件数	12
476	59	階層別研修（研究部長級・研究主幹級・主査級・新規採用職員）の受講者数	2
484	59	研究開発能力向上研修の受講者数	24
496	59	H25職員研究奨励事業課題数	1
520	76	グリーン購入の金額	2367千円

ISSN 1349-6522

平成25年度
地方独立行政法人 北海道立総合研究機構
十勝農業試験場

平成26年7月

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構
農業研究本部 十勝農業試験場 発行
〒082-0081 北海道河西郡芽室町新生南9線2番地
Tel 0155-62-2431
Fax 0155-62-0680
<http://www.agri.hro.or.jp/tokachi/>
